沙也可

さやか

作　大和屋かほる

◆登場人物

雑賀小源太・・・紀州雑賀鉄砲衆の頭首
戸田十兵衛・・・雑賀鉄砲衆
右馬之介・・・・雑賀鉄砲衆
土左衛門・・・・雑賀鉄砲衆
鳥居玄蕃・・・・加藤清正の配下／雑賀衆の監視役
京阿弥・・・・猿楽師／加藤清正の御伽衆
新三郎／麗珠（ヨジュ）・・・京阿弥一座の踊り手。実は釜山水軍長官の妻
宋　民泰（ソン　ミンテ）・・・朝鮮国要害・東來城主の息子
宋　鳳姫（ソン　ホンキ）・・・民泰の妹
姜　其毎（カン　キメ）・・・民泰・鳳姫の乳母
李　三月（イ　サムォル）・・・加藤清正軍の通詞

朝鮮国の義兵
朝鮮国の母子
京阿弥一座の女たち

プロローグ

「放てッ！」の大音声とともに、数十の鉄砲がいっせいに撃ち放たれる。空を突き破るような銃声が鳴り響く。と、舞台奥から「釜山水軍全滅ッ！」「倭軍が上陸するぞッ！」と、男たちの叫ぶ声。怒濤のごとく打ち付ける波音。海鳴り。

向こう（花道奥）より女二人駆け入って、花道七三にて、

女　あなたッ！

ひときわ大きく、一発の銃声が轟く。と、「鄭撥（チョンパル）殿ッ！」「鄭撥殿が撃たれたッ！」「釜山鎮水軍長官・鄭撥殿、討ち死にッ！　討ち死にッ！」の声。

女・麗珠、泣き崩れる。と、ふいに顔を上げ、眼前の海へ飛び込もうとする。もう一人の女・京阿弥が止めようとして揉め、

京阿弥　お止めッ。ここであんたが死んで何になるんだい。

麗珠　離してください。あの人は死んだ。この釜山の海でいっしょに死ねたら、私幸せなんです。

京阿弥　海に身を投げてそれで幸せなんて、ばか云うんじゃないよ。

麗珠　あの人は、釜山浦に倭軍を上陸させないために、船の先頭に立って水軍を指揮した。だから誰よりも先に狙われたんです。私たちのために倭軍に殺されたんです。

京阿弥　じゃぁさっき撃たれて、海に落ちた釜山水軍の人かい？

麗珠　（泣き）ヨボォ。

京阿弥　あんたの夫なんだね。それじゃなおのこと死んじゃいけない。無駄死になっちまうよ。

麗珠　もういいんです（海に飛び込もうとする）。

京阿弥　ばかッ（麗珠の腕を掴んでぐいっと引き寄せ、頬をたたく）。死んじまったらお終いだよ。さぁ、向こうを見てごらん。

麗珠　（顔を上げる）……。

京阿弥　向こうにいる男が見えるかい？

麗珠　はい。

京阿弥　あれがあんたの夫を撃った男だ。

麗珠　えッ！？

京阿弥　あんたの夫の命を奪った、あれが紀州雑賀衆の党首、雑賀小源太だ。

麗珠　雑賀衆党首、雑賀小源太。

京阿弥　さぁ、よぉく目に焼き付けておくんだ。そしてあの男を憎むんだ。あの男への憎しみがあんたを強くする。生き抜いて生き抜いて、いつか夫の仇を討つん

だ。いいかい、約束だよ。死んじゃいけない。男に負けちゃいけないんだ。

麗珠　あなたは日本人でしょ。どうしてそこまで私を。

京阿弥　女同士じゃないか。朝鮮の人間も日本人もないよ。さ、小指を出してごらん。

と、京阿弥、指切りをしようと、少々強引に麗珠の小指と自分の小指を絡ませて、

京阿弥　「ゆびきり」っていうんだ。

麗珠　ゆびきり？

京阿弥　これでもし、あんたが私との約束を破るような真似をしたら、指の先から五寸釘打ち込んでやるからね。

麗珠　（思わずおぞましさにからだを強ばらせる）ッ。

京阿弥　ああ、ごめんよ。昔の男がよく私にそんなこと云ってたんだよ。

麗珠　でもどうやってあの男を討つんですか？　そんなこと（できるんですか？）。

京阿弥　私にいい考えがある。あんた、踊り（は）好きかい？

麗珠　え？

京阿弥　踊りだよ。

麗珠　……はい。

海鳴りが激しく、急速に暗くなり――。

第一場　東莱（とんね）府城近く　加藤清正軍に従軍する雑賀衆の砦の内

夕刻

本舞台、明るくなると、雑賀衆の砦の内。鉄砲の手入れをしている右馬之介と土左衛門の前に、鳥居玄蕃、朝鮮人の女を突き飛ばすように押し出し、

玄蕃　そこへなおれッ。

右馬之介　どうかなさいましたか？　玄蕃様。

玄蕃　この女、わしの命を狙った。しかもこんなもので（鎌）。

土左衛門　ああ、こりゃ日本の鎌といっしょだな。よく使い込んである。

玄蕃　そんなことはどうでもいい。

右馬之介　（女に）あんた、朝鮮の人間か？

女　……。

玄蕃　昨日攻め落とした釜山城、我ら日本軍の砦とするため入城せんとしたところ、この女、城門の陰より飛び出して来よった。

土左衛門　（女の顔をしげしげと見て）おい右馬之介、この人の顔見てみろよ。

右馬之介　ええ？

土左衛門　俺たちと顔そっくりだ。

玄蕃　女、このおれを鳥居玄蕃と知ってのことか？

女　（玄蕃を睨みつける）。

右馬之介　玄蕃様、いくら玄蕃様が太閤様の覚えめでたい加藤清正の家来だからって、この朝鮮国まで知れ渡ってはいねぇだろ。

玄蕃　おい、我が主君・清正公を呼び捨てにするとは何事だ。

土左衛門　俺たちの大将じゃないからな、やつは。

玄蕃　下郎ッ、ことばを慎め。

右馬之介　玄蕃様、俺たちは天下の紀州雑賀衆。党首は、御大将ただ一人だ。

玄蕃　天下の雑賀衆とは笑わせる。かつては、雑賀の鉄砲を味方につければ勝ち戦さは間違いなしと、諸国の大小名が競っておまえたちを雇い入れたが、今や清正公の庇護の元で細々と生き延びているだけ。

土左衛門　とうとう俺たちだけになっちまったからな。

右馬之介　俺たちが一人でも生き残っていりゃ、雑賀衆は滅びねぇ。

玄蕃　ばか者っ。威勢はいいが、気づかんのか。清正公に逆らえば、それは太閤殿下に逆らうことになるんだぞ。殿下に逆らえば雑賀衆など風の前の塵に同じ。

右馬之介　（玄蕃を睨みつけたかと思うと、ふいに大あくびをした）ふわぁぁ……。

玄蕃　（右馬之介の胸ぐらを掴む）。

と、女、立ち上がり、土左衛門に体当たりをする。土左衛門は転がり、落とした鎌を女が拾い上げ、玄蕃に向ける。右馬之介、鉄砲を構える。

玄蕃　朝鮮の人間は戦さの仕方を知らぬ。そんなもので我らが倒せると思っているのか。こいつらしまいには屋根瓦まで投げつけてくる（笑う）。

と、女、鎌を振り上げる。玄蕃は小刀に手をかけ、「切るぞ」と脅す。

右馬之介　女相手に何威張ってるんですよ。

玄蕃　何。

右馬之介　どうするんです、この女。撃つんですか？

土左衛門　右馬之介ッ。

玄蕃　いや、殺す前に、これまでのように耳を削ぐんだ。その次は鼻だ。

土左衛門　俺は嫌だからな。絶対そんなことしないからな。

玄蕃　やるんだッ。

と、女は、玄蕃に鎌を振り上げ向かっていく。右馬之介の鉄砲が鳴り、女は鎌を落とす。女は泣き崩れる。土左衛門、駆け寄る。

土左衛門　大丈夫か、おまえ。おい右馬之介、危ないじゃないか。この人に当たったらどうするんだ。

右馬之介　ばーか。俺が外すかよ。だいいちこの距離だぞ。

玄蕃　（土左衛門に）よし、おまえだ。おまえが耳を削げッ（刀を渡す）。

土左衛門　いやだッ（震えながら、女を庇っている）。

玄蕃　おのれ、わしに逆らう気か。

右馬之介　玄蕃様、こいつ、こんな顔してますけど、この世に二人といねぇ恐がりなんですよ。夜中の小便だって俺が付いて行ってやってるんだ。ね、勘弁してやってください。

玄蕃　そんなことで戦さが務まるか。わしがその性根たたき直してやる。

と、玄蕃、小刀の鞘で土左衛門の背中を叩きつける。

右馬之介　土左衛門ッ。

と、その時、花道奥より「しばらく、しばらくお待ち下されッ。」の声がする。

右馬之介　あッ、あの声は。

と、向こうより、李三月とともに、雑賀小源太がやって来る。

土左衛門　大将ッ！

小源太　（七三にて）これはこれは鳥居玄蕃様。こやつらがまた無礼な真似をいたし

ましたか。

玄蕃　おぬしからもよっく云い聞かせておくんだな、この身の程を知らぬばか者どもに。

右馬之介　なにッ（食ってかかろうとする）。

小源太　控えッ、右馬之介。

右馬之介　（控える）ッ。

玄蕃　清正公のお召しであったそうだが。

小源太　はい。明日よりの東莱城攻略についてご下命を拝しました。

玄蕃　何と仰せだ。

小源太　はい。第一軍小西行長に遅れを取ってはならぬ。雑賀衆の鉄砲に物を云わせ、一日で東莱の城を落とせとのご命令でございました。

玄蕃　一日で。できるのか。

小源太　憚りながら、我らの撃つ鉄砲は、天下一にございますれば。

玄蕃　それは心強い。では雑賀殿、手始めに、その女の耳を削ぎ落とすよう、こやつらに命じよ。おぬしの命令なら聞くと云っておる。

三月　玄蕃様。

玄蕃　何だ、三月。

三月　一昨日の釜山上陸以来、捕らえた朝鮮の民の耳・鼻を削げとは、いったい何のためでございましょうや。

小源太　三月、控えよ。

玄蕃　からだの半分に朝鮮の血が流れるおまえのことだ。此度の朝鮮出兵、さだめし恨めしく思っているだろう。

三月　いいえ、私は身も心も日本人。この度の秀吉様のご英断には、心から感じ入っている次第にございます。

玄蕃　ふん。おまえの流暢な日本語、時としてわしは胸くそが悪くなる。

三月　玄蕃様ッ。

玄蕃　では教えてやろう。耳・鼻を削ぎ、塩漬けにして、肥前名護屋城におわす太閤殿下にお届けするのだ。さすれば武勲の確たる証し、大いに手柄となる。この（朝鮮の）地より首を持ち帰るわけにもいくまいて。

土左衛門　じゃこの人の耳を削いだって役には立たない。だってこの人サムライじゃないし、女の人だ。

玄蕃　塩漬けにした耳が、朝鮮国の大将軍のものか一兵卒のものか、はたまた女子どものものか、そんなことは構わぬ。

土左衛門　何だって！？

三月　（本舞台へ）お手柄をお望みなら、玄蕃様のお働き、私が幾重にも清正公にご報告いたします。生きた人間の耳・鼻を削ぐとは、あまりにも惨うございます。

玄蕃　三月、おまえの云うことを聞くつもりはない。

三月　玄蕃様ッ。

玄蕃　さぁ、雑賀殿。こやつらに命じるのだ（小刀を差し出す）。

小源太　玄蕃様ッ。

玄蕃　んん？　何か云うことがあるか、雑賀殿。

小源太　（本舞台へ）我ら雑賀衆はそのようなものは使いませぬ。この戦国の世を鉄砲一筋に渡り歩いて参りましたからな。

玄蕃　されば何とする。

小源太　その女の耳といわず鼻といわず、この小源太が一発で仕留めてご覧に入れまする。

玄蕃　（笑い）よう申された。しからばその耳撃ち落とせッ。

小源太　では。右馬之介ッ、その女を立たせ、こちらを向かせよ。

右馬之介　大将。

小源太　俺が命じるのだ。早ういたせッ。

右馬之介　はい。

と、右馬之介、女を庇おうとする土左衛門から女を引き離し、小源太の正面に立たせる。その間、小源太はすばやく火縄の用意をする。

土左衛門　止めろ。止めてくれェ。

小源太　（整い）女、覚悟はよいか。

女、固く目を閉じ、今にもくずおれそうになりながらも堪え、懸命に立っている。

小源太は鉄砲を構え、

小源太　止めた。

玄蕃　何ッ。

小源太　いやね、俺たちの鉄砲は六十間先の甲冑も貫き通す。こんな間近で撃てば、耳なんかふっ飛んじまって、とても塩漬けなんかにゃできないと思いますがね。それから、そこにいるあなたの顔にも、飛び散った耳たぶがべちゃぁって（飛んで来る）。べちゃぁって……。

玄蕃　おのれ、わしを愚弄する気か。

小源太　（戻り）先ほどあなたは、削ぎ落とした耳が大将軍のものか一兵卒のものか、あるいは女子どものものか、そんなことは構わぬとおっしゃいましたな。

玄蕃　それがどうしたのだ。

小源太　それではあなたは、恐れ多くも太閤殿下をたぶらかす御所存か？

玄蕃　何ッ。

小源太　あなたは我ら雑賀衆のお目付役。この朝鮮の地に渡って後、我らがかつてのように、太閤様に弓引かぬよう監視するのがお役目のはず。そのあなたが、太閤殿下を裏切るような真似をなさってよいものか。

玄蕃　ええい、黙れッ。

小源太　この女は我が身のまわりの世話をさせまする。三月、その人の名前を聞いてくれぬか。

三月　はい。（朝鮮語で）あなたの名前をお聞かせ下さい。

女　……姜　其毎。

小源太　カン　キメ。あなたはなぜ私たちと闘う。女の身で、しかも見ればあなたは、このあたりに暮らす農民ではないのか。武人は、朝鮮のサムライたちはどうしたのだ。

其毎　（泣く）。

三月　そのご質問には、私がお答えいたしましょう。

小源太　聞こう。

三月　一昨日、小源太様率いる雑賀衆のお働き目覚ましく、加藤清正公を総大将とする日本軍は、半日たらずで釜山城を攻め落としておしまいになられました。その勢いに怖じ気づいた釜山城内のサムライたちは、城とこの地の農民を見捨て、北へ逃げて行ってしまったのです。

右馬之介　ひでぇや。

土左衛門　そんなやつらサムライじゃない。

玄蕃　（笑って）さすれば、明日攻め入る東莱城もたいしたことはあるまい。あるいは、釜山城陥落の報せに浮き足立ち、すでに城を逃げ出しているやも知れぬ。

其毎　そんなことはありませんッ。東莱城主・宋象賢（ソン　サンヒョン）将軍は、決して私たちを見捨てて逃げるようなお方ではありません。今も近郷の農民た

ちを集め、日本軍と闘う準備をなさっています。

玄蕃　鎌や瓦を投げて日本軍と闘う準備をか。

其毎　そうです。

玄蕃　（笑う）。

小源太　其毎と云われたな。なぜ一介の農婦に過ぎぬあなたがそんなことを知っているだ？

其毎　それは……。

と、そこへ正面の大門の外から扉を叩き、開門を訴える声が響く。声の主は戸田十兵衛。

十兵衛（声）　開門ッ。開門ッ！

右馬之介　おお、あの声は十兵衛だ。

十兵衛（声）　土産がある。方々、早く開けられよッ。

右馬之介と土左衛門、扉の閂を外し、扉を開ける。と、そこに立っていたのは後ろ手に縛められた宋 民泰。その縄を持ち入ってくる十兵衛。

其毎　民泰様ッ。

十兵衛　ミンテ？

小源太　十兵衛、そやつ何者だ。

十兵衛　はい。大将は釜山城で最後まで我らに抵抗していた者どもがいたのを憶えているか？

小源太　忘れいでか。城壁から石や瓦を投げつけ、よう手こずらせてくれた。

十兵衛　あの者どもを指揮していたのがこやつよ。

小源太　ほう、そうか。おぬし、名は？

民泰　……。

十兵衛　答えぬか。

民泰　（睨む）。

十兵衛　女、先ほど呼んだのはこの男の名か？　おまえはこの男を知っているのか。

其毎　お労しや、民泰様。

民泰　其毎ヤ、おまえどうしてここに。（はっとして）まさか父上が、

其毎　いいえ。旦那さまはまだ城の内におられるはずでございます。

民泰　はずとはどういうことだ。

十兵衛　この男、何者か。

其毎　東莱城主・宋　象賢将軍のご子息・宋　民泰様でございます。

玄蕃　何！？　東莱城主の息子。でかしたぞ十兵衛。この男を人質にして攻め込めば、

民泰　東莱城を落とすは赤子の手を捻るようなもの。

民泰　ばかを云え。父上が俺の命ごときで心動かされるものか。

其毎　民泰様ッ。

玄蕃　親子の情は朝鮮の人間とて同じであろう。息子がむざむざ殺されるとあらば、

小源太　右馬之介、縄を解いてやれ（小刀を渡す）。

右馬之介　大将。

小源太　構わん。東莱城主のご子息に縄かけるなど、日本が礼を欠いた国と思われる。

玄蕃　雑賀殿、これは戦術なのだ。

小源太　人質など使わずとも、雑賀の鉄砲があれば城は落とせる。

玄蕃　待てッ。

土左衛門　（ばか力で玄蕃を押さえる）。

玄蕃　おい、離せッ。離せッ！

この間に、右馬之介、民泰の縄を小刀で切る。と、民泰、右馬之介の腕を捻り上げ、小刀をたたき落とす。その小刀を拾い上げた民泰は、右馬之介をあざやかに転がし、小源太ののど元に当てる。すばやく鉄砲を構え、銃口を民泰に向ける十兵衛。

小源太　撃つなッ。

右馬之介　大将ッ、すまん。

民泰　おまえたちはなぜこの国に攻め入ってきたのか。礼を欠くとはそのことではないのか。

小源太　（民泰に）俺を殺すか。

民泰　この陣の大将と見たからは、首をもらう。

小源太　俺の首を取ったとして、どうやってこの砦から抜け出す。

民泰　何？

小源太　ここで俺と刺し違えたのでは、何一つ朝鮮軍には伝わらぬぞ。おぬしの蛮勇は朝鮮国に聞こえることなく、闇に葬られる。

民泰　蛮勇！？

小源太　無鉄砲な勇気のことだ。

民泰　くそォッ。

小源太　そんなことより、どうだ。向こうでいっしょに酒を呑まぬか。

玄蕃　何を云う、小源太。

小源太　四月とはいえ、夜はまだ冷える。土左衛門、今宵の馳走は何じゃ。

土左衛門　昼間右馬之介と猪を狩っておいた。羹（あつもの）にしようかと思うている。

小源太　そりゃぁ豪儀だ。おぬし、猪の肉を羹にぶち込んでふうふうと喰ろうてみろ、堪えられぬ。

民泰　戦さの最中におまえたちは狩りをしていたというのか？

小源太　日本の俚諺に「腹が減っては戦叶わぬ」というのがある。三月、朝鮮にはそれに似たことばはないか。

三月　小源太様、今そのようなことを……。

小源太　いい加減にこの手を離してくれぬか。雑賀衆の党首があまり見てくれのいいものではないからな。

この時十兵衛が、空に向かって鉄砲を放つ。はっとなる民泰。小源太、その民泰の腕を取って後ろに回り込み、押さえつけて、

小源太　十兵衛、よけいなことをするな。一人でもやれたわ。

十兵衛　（笑って）それはすまぬことをした。

小源太　民泰、どうだ、俺の友とならぬか。

民泰　友？　ばかなッ。

小源太　嫌か？　それではやはりいっしょに猪を喰おう。友となるにはいっしょにものを喰い、かつ大いに呑むに如くはなし。おぬし、酒は嫌いか？

民泰　……好き。

小源太　よしッ。（放し）では呑もう。

民泰　おまえ、何者だ？

小源太　雑賀小源太。紀州雑賀衆頭首、雑賀小源太だ。

と、その時、頭上から一羽の鳥が落ちてくる。

十兵衛　もしかして、さっき俺が撃ったのが中ったのか。

小源太　十兵衛、さてもおまえは名人よな。

一同、笑う。玄蕃は苦々しく、

玄蕃　勝手にせえ（行こうとする）。

小源太　玄蕃様もいっしょにやりませぬか。

玄蕃　わしは、……猪は嫌いだ。

小源太　ならばこの鳥を、

玄蕃　小源太、よいか。このこと、清正公にご報告申し上げる。

小源太　好きになさるがいい。

玄蕃、去る。

小源太　三月。

三月　はい。

小源太　其毎殿を俺の帳房へお連れしろ。

三月　よろしいのですか？

小源太　構わん。

三月　はい。（其毎に）さぁ、あちらへ参りましょう。

其毎　民泰様。

民泰　其毎ヤ。たとえこやつらがおまえの命を奪わんとしても、決して取り乱してはならぬ。

其毎　はい。

民泰　俺も、すぐ後から逝く。

其毎　はい。

其毎、涙を隠し、そのまま三月に伴われ、去る。

土左衛門　（その後ろに）あとで猪持って行ってやるからッ。……元気が出るぞォ。

小源太　あの其毎という女、どういう知り合いだ。

民泰　おまえに云う必要はない。

右馬之介　おい、ちゃんと答えろ。

民泰　俺はおまえの質問に答える気も、友になる気もない。

小源太　民泰よ、よく聞くがいい。我らは明日未明より東莱城に攻め込む。そなたの父が城主を務める城だ。雑賀衆の鉄砲隊を与する清正軍の攻撃は苛烈。俺の見るところ、城はよく持って一日だ。

民泰　一日！？

右馬之介　玄蕃じゃねぇが、この国の人間は戦さの仕方を知らな過ぎる。

土左衛門　ここでは戦さはないのかい？

民泰　我が朝鮮国はこの二百年の間、人々は田畑を耕し平和な暮らしを続けてきた。戦さに明け暮れ、人を殺す術に長けた民族と、どちらが上か。

右馬之介　しかし他国から攻め込まれればこの様だ。

民泰　我が国を侮るな。朝鮮国の人間として意地も誇りもある。

小源太　意地で戦さは勝てぬ。

民泰　何ッ。

小源太　民泰よ。確かに俺たちは人殺しの術に長けているやも知れぬ。だが我ら、決して人の命を奪うことを善しとしてはおらぬ。

十兵衛　大将……。

小源太　この戦さ、長引けば必ずや双方にとって地獄。長く禍根を残す戦さともなろう。……民泰、おぬしやはり俺の友となれ。友となり、朝鮮国の内情、その軍略、これより都・漢城までの主な陣営と兵の数。おぬしの知るところすべてを教えるのだ。

民泰　おまえたちの犬になれというのか、この俺に。

小源太　犬ではない。友だ。

民泰　まやかしを云うな。

十兵衛　なりません。そのようなこと、こやつが偽りを申せば、我らの命取りになります。

小源太　分かっておる。

十兵衛　我らを裏切り陥れるは必定。

小源太　くどい。

土左衛門　大将、云っとくがな、俺は紀州に帰らねばならん。

右馬之介　土左衛門、今そんなこといいじゃねぇか。

土左衛門　いや、俺は生きて帰らねばならんわけがあるんだ。

右馬之介　分かったよ。後で話を聞いてやるから。

小源太　民泰よ。もう時がない。東莱城におられる父上に、降服を勧める書面をしたためよ。戦うを止め、城を明け渡すよう使者を出すのだ。さすれば我らもいたずらに城内のサムライたちの命を奪うことなく、戦さもそれだけ早く終わらせることができよう。

民泰　すべておまえたちの理屈。俺が従うと思うか。

小源太　意地を張っているときではない。

民泰　殺せ。俺を殺すのだ。おまえに一片の人の心があるなら、ここで俺を死なせてくれ。

小源太　民泰ッ、死ぬのはいつでもできる。

右馬之介　大将、これ以上は無駄だ。そいつの望み通り、死なせてやろうじゃないか。十兵衛、貸せ（十兵衛の持つ鉄砲を取ろうとする）。

小源太　待てッ、右馬之介。

右馬之介　大将、あんたおかしいぞ。

小源太　おかしい？　俺がか。

右馬之介　策を弄せずとも、俺たちの鉄砲があれば城は落とせると、さっき大将が云う

たばかりではないか。

小源太　その通りだ。

右馬之介　俺たちは戦さをするため海を渡ってここまで来た。

小源太　人を殺すだけが戦さの勝ち方ではない。

右馬之介　しかしそれは我ら雑賀のやり方か？

土左衛門　右馬之介、大将に向かって……。

右馬之介　てめぇは黙ってろ。

小源太　（民泰に）おぬしは死なせぬ。民泰よ。

民泰　もう云うな。

小源太　先ほどの俺の頼みを受け入れてくれるなら、我ら雑賀衆は、今日より以後、決して朝鮮の民を殺さないと約束しよう。

右馬之介　大将ッ。

民泰　そんなことが信じられると思うか。

小源太　約束は守る。

民泰　倭人との約束など信じられぬ。

右馬之介　大将、俺たちは人形相手に闘っているわけじゃない。向かってくるんだぞ。

小源太　威嚇射撃を行う。

右馬之介　本気か？　本気で云ってるのか。

小源太　むろんだ。

右馬之介　大将は気が違われたか。

十兵衛　右馬之介、ことばが過ぎるぞ。
小源太　よい機会だ。あらためておまえたちに命じておくことがある。
土左衛門　なんだよ、大将、改まって。
小源太　よく聞くがよい。

一同、固唾を呑む。

小源太　我ら雑賀衆、この戦さにおいて一人（いちにん）も死ぬことはならぬ。

一同、顔を見合わせるが、一瞬の後、笑い出す十兵衛。

十兵衛　大将、いくら大将の云うことでもその命令には従えぬぞ。
小源太　なぜだ。
十兵衛　ここは戦場。そして我らは戦さをしにこの朝鮮くんだりまでやって来たのだ。
小源太　そんなことはわかっておる。
右馬之介　戦さと云えば人が死ぬのは当たり前だ。
小源太　死なずにすむならその方がいいではないか。
土左衛門　ああ、そうだな。
右馬之介　おまえは黙ってろ。
十兵衛　その男（民泰）との約束を守るおつもりなら、我らは朝鮮国の人間も殺せず、

死ぬこともならぬということになる。

小源太　そうだ。

右馬之介　それで俺たち手柄が立てられるかよ。

小源太　俺の命令が聞けぬか。

右馬之介　気の違うた大将の命令など聞けぬ。

民泰　（笑い出す）。

右馬之介　（民泰を殴りつける）ッ。

小源太　右馬之介ッ（民泰を助け起こす）。

十兵衛　大将、右馬之介の云うことはもっともだ。そうまでして我らがこの戦さに加わる必要があるのか。

小源太　十兵衛、おまえまでがそのようなことを云うのか。

十兵衛　わかっている。

小源太　ならば十兵衛、

十兵衛　だが俺は、俺は、秀吉づれに頭を下げることが我慢ならんッ。やつのためにこの朝鮮で戦うことが、本当に我ら雑賀衆の再興に繋がるのかッ。

小源太　そのことはもう何度も話し合うたではないか。

右馬之介　そうだ。俺たちは、雑賀衆をもう一度昔のように守り立てるため、朝鮮で戦さをすると誓った。朝鮮で手柄を立て、秀吉に俺たちの働きを認めさせればその悲願が叶うと。

小源太　その通りだ。

右馬之介　だがあんたは人は殺してはならんと云う。大将はこの朝鮮に来てから人が変わったとしか思えねぇ。

小源太　俺が変わった。

十兵衛　かつての大将なら、その男使い物にならぬとわかれば、迷わず殺していた。

小源太　十兵衛。

右馬之介　大将、どうしちまったんだよッ。

と、そこへ猿楽舞の曲が聞こえてくる。

土左衛門　あ、京阿弥だ。……玄蕃がまた命じたな。

右馬之介、振り切るように行こうとする。

小源太　（鋭く）どこへ行く、右馬之介。

右馬之介　酒の用意をする。土左衛門、おまえも来い。

土左衛門　おお。

小源太　右馬之介ッ。……猪は煮すぎるな。かたくてとても喰えたものではない。この間の土左衛門のようなのは御免だぞ。

右馬之介　（ぱっと明るく）あったり前よ。土左衛門のつくる田舎料理といっしょにしねぇでくれ。

土左衛門　あれは横から右馬之介がくだらないこと云って邪魔するから、気が散っちまったんだよ。猿も木から落ちるだ。

右馬之介　おまえは生涯落ちっぱなしだよ。

一同、笑う。

右馬之介　女の話をしただけじゃねぇか。

十兵衛　土左衛門に女の話か。そりゃ気も散るだろう。

土左衛門　こいつ、京阿弥と懇ろになりてぇって、しつこいんだ。

小源太　なんだ右馬之介、まだ京阿弥観音のご開帳にお与りではないのか。

右馬之介　なんのなんの、これからよ。

土左衛門　俺は京阿弥が恐ろしい。

右馬之介　恐ろしい？

土左衛門　ああ。あの女は得体が知れねぇ。

右馬之介　得体の知れた女におもしろみがあるのかよ。

十兵衛　さすが右馬之介、云うことに隙がない。

右馬之介　それほどでもねぇよ（大袈裟に笑う）。（土左衛門に）ま、おまえには新三郎がお似合いだよ。

土左衛門　新三郎は男じゃないか。

右馬之介　女、嫌いなんだろ。

土左衛門　嫌いじゃないよ。

右馬之介　じゃどういう女が好きなんだよ。

土左衛門　なんで清正のお殿さんは、戦さに京阿弥や一座の女たちを連れてきたんだ？

右馬之介　聞けよ、人の話。

小源太　虎退治にもお飽きになったんだろう。

土左衛門　（感心して）そうかぁ。踊りが好きなのか。

右馬之介　おまえそれ本気で聞いてんのか。

土左衛門　何を。

右馬之介　女のことだよ。なんでここに女がいるかってこと。

土左衛門　右馬之介は知ってるのか。

右馬之介　あほ。だからさ、戦さしてたって俺たち男は男なんだよ。

土左衛門　当たり前なこと云ってるよ。戦さして女になるか？

右馬之介　（じれて）わからねぇ野郎だな。大将、なんとか云ってやってくれよ。

この時、京阿弥がやってくる。土左衛門、気づかず、

土左衛門　（右馬之介に）とにかくあの京阿弥には近づかない方がいい。おっかないからな。おまえみたいな何にも知らないおぼこ男を見ると、頭からガリガリ囓りついてくるかも知れない。

右馬之介　（京阿弥に気づいて）そんなことはねぇよ。あの京阿弥は踊りはうまいし、気

だてもいいし、いい女だ。

土左衛門　おい、いいか誰にも云うなよ。京阿弥は夜中になると首が伸びて、灯し油を舐めてるって聞いたぞ。

京阿弥　誰がろくろ首だって。

土左衛門　（気づき）ひぇぇぇッ（腰を抜かす）。

京阿弥　そんなこと誰から聞いた。

土左衛門　なんまんだぶ、なんまんだぶ……

京阿弥　誰から聞いたッ。

土左衛門　右馬之介。

右馬之介　おいッ。

一同、また笑う。

小源太　どうだ民泰。おかしな連中であろうが。

民泰　おまえたちはいったい何者だ。この戦場で喰い物の話をし、女の話をして笑い合うている。

小源太　京阿弥、堪忍してやってくれ。

京阿弥　こいつらの云うこと、いちいち真に受けているもんですか。

右馬之介　いいのか、ここにいて。（茶化して）玄蕃様が、ぬしの踊りをご所望ではなかったのか。

京阿弥　ふん。いいのさ。ひとに踊れと云っときながら、酒が入るとすぐにこれさ（うたた寝の仕種）。

小源太　ではこの猿楽は（誰が）……。

京阿弥　新三郎さ。あの男、以前は念仏踊りで諸国を回ってたらしいけど、筋がいい。一座にとってはめっけもんだよ。

十兵衛　今はやりの念仏踊りか。たしか名護屋城下で拾った男と云っていたが、そうだったな。

京阿弥　小源太様、一度新三郎の踊りを見てやっておくれよ。

小源太　んん、どうも俺はああいうものが苦手でな。

京阿弥　何云ってるんですよ。あなた様のお父上はそれはそれはカブいたお方。踊りをたしなまれ、我らおなごをこの上のう可愛がってくださりました。その御嫡子ともあろうお人が、情けなや。

小源太　ああ、わかったわかった。では踊れ。

十兵衛　大将も京阿弥にかかっちゃ形無し（かたなし）だな。

小源太　云うな。

京阿弥　さすがは戦国の世にこの人ありと云われた紀州雑賀孫市様の御嫡子。

小源太　世辞はいいから、早う踊れ。

京阿弥　では。

チョーンと柝が入り、

京阿弥　とざい、とーざい。何れもさまにおかれましては、この京阿弥一座の猿楽舞、とくとご覧くださりましょう。

そのかけ声とともに、小袖の袂で顔を隠した男が走り出る。京阿弥がすっと傍に寄り、二、三、振りがあって、キマったところで柝が入り、男、袂を開き顔を見せる。胸元にはロザリオが下がっている。

右馬之介　新三郎ッ。

新三郎　小源太様、いっしょに踊ってはくださりませぬか。

京阿弥　新三郎。

小源太　馬鹿を申すな。俺が踊れるものか。

新三郎　踊るとは難しいことではございません。その時その時のお気持ちのまま、おのがこころに身をまかせれば、それでよいのでございます。

小源太　さすれば、踊りを見ればその者のこころが見えるということになるな。

新三郎　さようにございます。

小源太　京阿弥、踊りとはやはり恐ろしいものよな。

京阿弥　こころ踊るがまことの踊り。なんの恐ろしいことがありましょう。

右馬之介　大将ともあろうお方が、踊りが恐ろしいとな。

小源太　ではおまえが踊うてみよ。

右馬之介　俺？　いやぁ惜しいなぁ。俺は親父の遺言で、踊りだけはおどっちゃいけねぇって云われてんだ。

土左衛門　俺たちが和歌浦を出る時、おまえの親父さん元気に手ェ振ってたじゃないか。

右馬之介　あほッ。あれは親父じゃねぇよ。

土左衛門　じゃ誰だよ。

右馬之介　誰って、昔っから俺の家にいてえらそうにしてるヤツでさ、ありゃぁどうも、お袋とできてやがるな。

音楽が入り、踊り出す京阿弥と新三郎。

やがて京阿弥は右馬之介を踊りに巻き込む。京阿弥と新三郎の間で右往左往する右馬之介はよろよろと転んでしまう。京阿弥、右馬之介の下半身に馬乗りになる。男たち、手を叩いて喜ぶ。曲に合わせて腰を動かす京阿弥。卑猥ではあるが、淫靡な感じはしない。さらに沸き上がる男たち。

この時、小源太は民泰を促し、そっと去る。後を追おうとする新三郎。踊りの振りを模して、新三郎を引き留める京阿弥。

小源太と入れ替わるように、京阿弥一座の女たちが入ってきて、にぎやかに総踊りとなる。

踊りがキマったところで、京阿弥と新三郎を残して暗くなる。小源太の後を追おうとする新三郎の前に立ちはだかる京阿弥。

新三郎　退いてください。
京阿弥　こんなところでやれるとでも思ってるのかい。
新三郎　退いてッ（押しのけていこうとする）。
京阿弥　（引き止め）ああ見えても、あいつらは鉄砲を持たせれば天下一。今動けばみすみす犬死にするようなもんだよ。
新三郎　私なんかもう死んだっていいんです。
京阿弥　もう一回云ってみな。
新三郎　だって、
京阿弥　約束したじゃないか。（胸のロザリオを握り示し）夫の仇を討つまでは死なない。あの雑賀小源太の命を取るまでは生きるって。
新三郎　あなたと約束（自分のロザリオを握る）。
京阿弥　そうさ。だから新三郎、それまでは踊るんだ。踊り続けておくれ。あの男だって切れば血の出る人間だ。私たちが踊る前で必ず隙を見せる時がある。
新三郎　でもあの男は踊りが好きじゃない。
京阿弥　だから、あんたがもっともっと日本の踊りがうまくなれば、小源太だって見ようって気になるよ。
新三郎　京阿弥さん。
京阿弥　何だい。
新三郎　私は今、夫の命を奪った国の歌を歌い、踊っている（込み上げてくる）。
京阿弥　新三郎、いつか私の猿楽舞とあんたの国の踊りと、いっしょに踊れるといい

ね。そうして二つの国の人間がそれを見て、いっしょに手を叩いて笑い合っているんだ。

新三郎　そんな夢みたいな時が来るでしょうか。

京阿弥　ああ来るさ。突拍子もない望みかも知れないけど、でも思い続けなきゃ望みは叶わない。そうだろ？

新三郎　どうしてあなたはいつも私を助けてくれるんです？

京阿弥　いつも云ってるだろ。

新三郎　男はみんな敵だから。

京阿弥　（少し笑って）いつか私に、あんたが踊ってたっていう朝鮮の国の踊りを教えておくれ。

新三郎　それを約束したら、果たすまでまた死ねなくなりますね、私。

京阿弥　死んで花実が咲くものか。

新三郎　（朝鮮語で）でもやっぱり私は早くあの男を殺して、夫のところに行きたい。

京阿弥　え？　何て云ったんだい？

と、突然銃声が大地を震わせるように鳴り響く。急速に暗くなり、

第二場　前場と同じく東莱府城近く　加藤清正軍に従軍する雑賀衆の砦の内

昼

銃声。男たちの怒号。弓矢が空を突っ切る。断末魔の絶叫。戦場の戦きと混乱が舞台に満ちる。

本舞台明るくなると、雑賀衆の砦の内に、小源太、手に儀仗を持った玄蕃、そして朝鮮の衣服のままの民泰がいる。

玄蕃　（苛立ち）雑賀殿、まだか。

小源太　まだでございますなぁ。

玄蕃　おぬし一日で城を落としてみせると豪語したではないか。

小源太　豪語してはおりません。ふつうに云っただけです。

玄蕃　何だふつうにとは。

小源太　玄蕃様、そのように焦らずとも、まだ日は高うございます。

玄蕃　ええい急ぐのだ。清正公の厳命だぞ、小源太。

小源太　厳命をお受けになったのは、玄蕃様も同じでございますな。

玄蕃　何。

小源太　我らの働き芳しからざれば、お目付役としてはまずうござるな。清正公からお叱りを受けることとなりましょう。

玄蕃　（儀仗を鞭のように鳴らし）民泰、もう一度云う。東莱城主に降服せよと書

状を書くのだ。おまえの父に命乞いをするのだ。

民泰　昨夜も云ったはず。俺はおまえたちの犬になった覚えはない。

玄蕃　（民泰の胸ぐらを掴み）おまえを生かしてやっているのは、何のためだと思っている。

民泰　俺は早く殺せと云っている。

玄蕃　民泰（首を締め付ける）。

小源太　玄蕃様、そやつは大事な人質。なりません。

玄蕃　（投げつけるように民泰を放す）。

民泰　おまえたちは何を焦っているのだ。（玄蕃に）おまえも、おまえが仕えるその加藤清正という男も、なぜそのように先を急ぐ。

玄蕃　黙れッ。

小源太　民泰、余計なことは云わぬがよい。

右馬之介（声）　大将ぉッ！　大将ぉッ！

と、この時、花道奥より右馬之介の声がして、宋鳳姫を間に、土左衛門と右馬之介、背中に鉄砲を担ぎ、花道より、何者かに追われるようにやって来る。七三にて、土左衛門、転び、

土左衛門　いってェッ。

右馬之介　（手に鳳姫を後ろ手に縛った縄を持っている）あほッ。何してんだよ。

土左衛門　おまえが後ろから急かすからだろ？　おぉ痛ッ。

右馬之介　いいから、早く立てよ。

と、鳳姫、本舞台の民泰に気づき、また民泰も鳳姫に気づき、

鳳姫　兄様ッ！

民泰　鳳姫？　……鳳姫ッ。

と、鳳姫、縛められていることも忘れ、民泰の方に走り出す。右馬之介は逆に引っ張られ、ようやく立ち上がったばかりの土左衛門とぶつかって、縄を放してしまい、二人、もつれて転ぶ。

右馬之介　いってェッ。

土左衛門　ばか野郎ッ。何やってんだよォ。

鳳姫　兄様ッ。

と、民泰、鳳姫を抱きしめ、

民泰　無事であったか、鳳姫。

鳳姫　兄様も、よくぞご無事で。

民泰　（縄を解き）再びおまえに会おうとは（思わなかったぞ）。

玄蕃　兄様！　待て民泰、その女、おまえの妹か？

民泰　この者に指一本でも触れてみろ、容赦はせぬ。

玄蕃　おまえはわしに命令できる立場にはない（民泰を儀仗でたたく）。

小源太　玄蕃様ッ。

玄蕃　ならばこの女、東莱城主の娘か。

鳳姫　そうです。私は東莱府城主・宋象賢の娘、宋鳳姫。

玄蕃　なるほど大将軍の娘らしい、気の強い目をしておる（手で顎の辺りを押さえ、値踏みするよう鳳姫の顔を見る）。

鳳姫　無礼者ッ（その手をたたき払う）。

玄蕃　（笑い）気に入ったぞ、鳳姫とやら。

鳳姫　兄様（民泰を助け起こす）。

小源太　右馬之介、その人はどうしたのだ？

右馬之介　あ、どうしたって、その……、

土左衛門　（本舞台へ）助けてきたんだ。清正んとこの家来が、陣営に連れて行こうとしてたから。

右馬之介　（後を追って本舞台へ）あほッ、余計な事云うな。玄蕃がいるだろ。

土左衛門　だって、その人乱暴されそうになってたじゃねぇか。

右馬之介　黙ってろって。

玄蕃　今何と申した。清正公の家来から奪い取ったというのか。

右馬之介　そんなこと云っちゃいませんよ。（土左衛門の鳩尾にひじ鉄）な。

土左衛門　うッ、うーん。

玄蕃　有り体に申せッ。

右馬之介　た、大将。

小源太　玄蕃様、委細はこの小源太が問い質し、後ほどご報告申し上げる。

玄蕃　雑賀殿、事と次第によってはその者たちの咎、おぬしに責めを負うてもらうことになるやも知れぬぞ。

小源太　もとよりそのつもりでござる。

玄蕃　ふん。

民泰　父上はご無事か。父上はいずこにおられるのだ。

鳳姫　（泣く）。

民泰　泣いていてはわからぬ。どうしたのだ。

鳳姫　容赦なく撃ち込まれる鉄砲を前に、城内の朝鮮軍は為す術もなく、死者の数も増すばかり。もはやこれまでと父上様は覚悟をお決めになり、一室にお入りになりました。

民泰　何ッ。

鳳姫　蛮族たる日本軍の手にかからんよりは、潔く城主として果てると、私におっしゃって（泣く）。

民泰　父上。

玄蕃　そうか、象賢は死んだか。さすれば東莱城は陥落したも同然。民泰よ、おまえのおかげで、我が軍は一日で東莱の城を落としたぞ。

鳳姫　兄様のおかげ？　兄様、それは（いったい）……。

玄蕃　鳳姫、おまえの兄は我が日本軍の犬となったのだ。

民泰　玄蕃、何を云う。

玄蕃　犬となって、わしたちに朝鮮軍の戦況を知らせるという約束だ。

鳳姫　兄様……。

小源太　玄蕃様、戯れが過ぎまする。

玄蕃　戯れではないッ。そうではないか、なぁ民泰。

民泰　嘘だ。俺がそのようなことするはずがない。

玄蕃　ならばなぜわしたちがおまえを殺さず生かしておくというのだ。

鳳姫　兄様ッ。

民泰　俺を信じろ、鳳姫。

玄蕃　なぜこれほどまでにたやすく東莱城を落とすことができたのだ。

民泰　陥落してはいない。

小源太　鳳姫とやら、兄の云うことは本当だ。犬ではない。俺たちは友になろうと約束したのだ。

鳳姫　おまえたち日本人と友になる、兄様が。父上様を殺した日本人と。嘘でしょ、兄様ッ。

民泰　小源太、かように敵の人間を愚弄するのが日本のやり方か。

小源太　違う。

鳳姫　兄様、私といっしょに死んでください。

民泰　鳳姫ッ。

鳳姫　これ以上父上様の名を汚すことはお止めください。

民泰　聞くのだ鳳姫、俺は誓って日本軍の犬などではない。

鳳姫　兄様、私はこれ以上こんなところで生きていたくはない。いいえ、父上様の跡を追って、東莱のお城でなぜ自害しなかったのか（こみ上げる）……。

民泰　鳳姫、俺とておめおめと生きていたくはない。

鳳姫　ならば兄様、ここで共に父上様の跡を追いましょう。私は死ぬのは怖くない。

玄蕃　健気じゃ。のう民泰、かように健気な妹をよもやおまえは死なせられまい。

民泰　きさま、どういう意味だ。

玄蕃　鳳姫を助けたくば、まこと犬となれ。

小源太　玄蕃様。

玄蕃　よいか雑賀殿、策とはこのように巡らすものだ。

小源太　策とは功を奏してなんぼのもの。玄蕃様はちとこの者たちを侮っておられる。

玄蕃　何だと。

小源太　この者たちには、命より大切なものがあるよう見受けられる。

玄蕃　ふん、なんだ、それは。

と、この時花道奥より十兵衛の声。

十兵衛（声）　大将オッ。大将オッ！

と、花道奥から十兵衛、駆け込み、七三にて、

小源太　どうした十兵衛。何かあったのか。

十兵衛　おおッ。東莱城主・宋象賢殿、清正公の手の者に捕えられ、ただ今陣営にて清正公とご対面ッ。

民泰　何ッ。

玄蕃　まことか。

十兵衛　おおさ。今ほど勇猛なる面構えの男が陣営に引っ立てられて行くのを見たが、おそらくあれが象賢殿（本舞台へ）。

と、玄蕃、急ぎ花道を駆け入り、去る。

鳳姫　父上様が生きておられたと云うのですか。

十兵衛　おまえは何者か。

鳳姫　宋象賢の娘、鳳姫。

十兵衛　娘。

民泰　父上は、東莱城とともに死んだ。そうであったな、鳳姫。

鳳姫　はいッ。
十兵衛　いや確かにあれは象賢将軍と、別の朝鮮人捕虜が云っていた。
民泰　父上。
鳳姫　いいえ、父上様は確かに覚悟をかため、一室にお入りになり、
民泰　では自害して果てられるのを見届けたわけではないのか。
鳳姫　はい。でも、
右馬之介　ここでぐずぐず云っていても埒があかないぜ。
鳳姫　兄様。
民泰　……我が父の願いは何よりも民草の安寧な暮らしだった。
小源太　民草の安寧な暮らし。
民泰　父上は傍らに俺を呼び寄せ、いつもそう話しておられた。
小源太　俺も会うて話がしてみたい。
鳳姫　父上様が願った民草の安寧な暮らしをおまえたちは踏みにじったのです。
民泰　父上が生きておられる。すぐそこの陣営においでになるのだな。
十兵衛　おお。
小源太　何とする、民泰。
民泰　小源太、おまえは俺に友になれと云ったな。友となり、俺がおまえたちに協力すれば、この戦さを早く終わらせることができると云ったな。
小源太　おお、云うたとも。
民泰　そのかわり、今後朝鮮の民は決して殺さぬと。

小源太　おお、それも嘘ではない。
鳳姫　兄様？
民泰　もし約束を違えれば何とする。
小源太　……雑賀衆の党首を辞め、おぬしの目の前で腹を切る。
十兵衛　大将？！
民泰　（小源太を見つめる）。
鳳姫　兄様、なりません。
民泰　雑賀小源太、この民泰、今日より貴様の友となる。
鳳姫　兄様ッ。
小源太　民泰、よくぞ云った。
鳳姫　兄様、兄様は朝鮮の人間としての誇りをお捨てになるのですか。
民泰　捨ててはおらぬ。
鳳姫　ひとの国に土足で踏み入り、祖国の地を蹂躙した蛮族の輩と、兄様は友になると云われるのですか。
民泰　もう云うな。
鳳姫　いいえ兄様、兄様が人の道に外れたことをなさろうとするのなら、鳳姫、この身を投げうってもお引き留めいたします。
民泰　（強いて振り切るように）小源太、昨夜の猪はまだ残っているか。
鳳姫　兄様ッ。

民泰　おまえたちは羹（あつもの）にして喰うと云っていたが、朝鮮ではそのような喰い方はせん。もっとうまい喰い方がある。

土左衛門　どうするんだ、教えてくれよ。

民泰　教えてやる。さぁ連れて行けッ（行こうとする）。

鳳姫　……兄様ッ！

その鳳姫の声に、一同、行くのをためらう。

民泰　……（挑発でもするように）どうした、猪のうまい喰い方を教えてほしくはないのか。誰か猪を撃ち取ってこいッ。

鳳姫　ペシンヂャ。

民泰　鳳姫ッ。

鳳姫　ペシンヂャ！

民泰　（ふり切るように小源太に）さぁ、俺をどこへでも連れて行ってくれ。おまえと酒を酌み交わそうぞ。

小源太　おう民泰、酔いつぶれるまで呑もうぞ。

右馬之介　大将、このお姫様をこのままにしておいていいんですか。

三月（声）　その方のお世話は私がいたします。

と、声がして、三月が来る。

小源太　三月、だいじょうぶか。

三月　はい。小源太様には心おきなく。

小源太　だが女子ばかりではちと不用心だな。

土左衛門　俺がいてやるよ。

右馬之介　猪はいいのかよ。

土左衛門　俺は朝鮮の喰い方など教わらなくてもいい。

右馬之介　おまえさっき教えてくれって云ったじゃねぇか。

小源太　（民泰に）では、行こう。

鳳姫　（行こうとする民泰に）ペシンヂャ！

小源太　（三月、）「ペシンヂャ」とは何だ。

三月　はい、「裏切り者」。

民泰　（朝鮮語で）鳳姫、決して死んではならぬ。生きよ（行く）。

小源太　……。

民泰、小源太と右馬之介とともに去る。

土左衛門　（三月に）今あの男は何て云ったんだ。

三月　云ってもよろしうございますか？

鳳姫　なぜ私に聞くの？　あなたは日本人の味方なんでしょ。

三月　……「決して死んではならない。生きよ。」と。

土左衛門　そうだな。死んじまうと紀州に帰れないもんな。

鳳姫　あなたは朝鮮の人間なの？

三月　いいえ、日本人です。

鳳姫　ではなぜ朝鮮のことばが話せるの？　なぜあなたは私たちと同じ朝鮮国の名で呼ばれているの？

三月　それは……。

土左衛門　三月の親父さんは朝鮮の人なんだ、な。

鳳姫　本当なの？

三月　それを聞いてどうなさるのです。

鳳姫　なぜこの野蛮人たちの味方をするの。

三月　日本人を野蛮な民と決めつけるのは、お止めになった方がよろしいでしょう。

鳳姫　ペシンヂャ。

三月　鳳姫様ッ。

土左衛門　（間に入り）けんかするなよォ。

鳳姫　（土左衛門を突きのけ）近づかないでッ。

土左衛門　（ごろりと転び）、痛てぇぇ。

三月　（助け起こしながら）大丈夫でございますか？

鳳姫　おまえが何と云おうと、その者たちは私の敵。野蛮なる民です。おまえがその者たちの味方というのなら、同じ輩と見なし、以後おまえとことばは交わさ

ない。

其毎（声）　お待ち下さい、鳳姫様。

と、そこへ其毎。

鳳姫　其毎ヤ？　其毎ヤッ。

其毎　鳳姫様、よくぞご無事でいらっしゃいました。

ふたり、抱きしめ合う。

鳳姫　おまえは釜山へ行くと云って、城を飛び出したままそれっきり。心配していたのですよ。

其毎　はい。

鳳姫　釜山は真っ先に日本軍によって汚された地。たくさんの人が殺されたと聞きました。

其毎　あの時は、ただもう釜山城に出向かれていたの民泰様のことが気がかりで、旦那様がお止めになるのも聞かず、ままよとばかりに（釜山）城に駆けつけました。

鳳姫　其毎ヤ。

其毎　鳳姫様、しばらくこの乳母にお耳をお貸し下さい。

鳳姫　何です、其毎ヤ。

其毎　この方は決して今あなたがお思いのような方ではありません。お話を聞いて差し上げてください。

鳳姫　（三月に）おまえはどうやって其毎を手なずけたの？

三月　鳳姫様。

其毎　お願いでございます。この方のご両親のお話を、どうか、

鳳姫　どんな話を聞いても私の気持ちが変わることはありません。

三月　私はあなた様のお気持ちを変えるつもりなどございません。ただ私のような人間もいるのだと、知っていただきたいのです。

其毎　鳳姫様ッ。

鳳姫　（座る）。

三月　私の母は対馬の漁村の娘でした。貧しい村で、魚を獲るだけが生きるたつきの、慎ましい生活をしていました。しかし対馬は小さな島。ひとたび海が時化となれば、漁に出られない日が続き、私たちはひもじくとも海が凪ぐのを待つより他ありませんでした。でも、そんな時、荒海を冒して米や野菜を私たちに届けてくれたのが朝鮮の人たちでした。

土左衛門　そんな話はじめて聞いたぞ。

三月　本当のことでございます。私の父は食べ物を届けてくれた男たちの一人。母を見初め、母も父を愛し、私が生まれたのです。

土左衛門　じゃ今も対馬に二人でいるんだな。

其毎　お父様はお亡くなりになったそうです。

土左衛門　海で難破でもしたのか。

三月　いいえ。父は名護屋の城普請の際に人足としてかり出され、石垣を積み重ねている時、誤って落ちてきた石に押しつぶされて命を落としました。

其毎　むごいことです。

土左衛門　俺、朝鮮に渡る前、大将たちと名護屋城を見たよ。とてつもなくでかい城だった。

三月　太閤様が朝鮮出兵のために、九州の諸大名に築城をお命じになった城。大坂城にも劣らぬその城は、肥前の国にたった三月余りで完成いたしました。さぞ過酷な普請であったろうと思います。対馬から人足として連れて来られた人々の中に、父のような朝鮮の民もいたそうでございますが、休むこともならず、石垣普請に服していたそうでございます。

鳳姫　それも豊臣秀吉という男の命令なのですね。

三月　はい。

土左衛門　お袋様の方はどうしてなさるんだ。

三月　母はまだ対馬におります。

土左衛門　そうか。ならおまえも早くここから帰りたいだろ。

三月　あなたは紀州に帰りたいわけがあると、いつも云っておいでですね。

土左衛門　まあな。へへ、そのわけが聞きたいか？

三月　お話しになりたいのですか。

土左衛門　三月、おまえなんかイヤな感じだぞ。
三月　すみません。どうぞお聞かせください。
土左衛門　ほんとに聞きたいと思ってるのか？
三月　いえ、あまり。
土左衛門　（泣く）。
其毎　（笑って）私は聞きたいよ、土左衛門。
土左衛門　やっぱり其毎は優しいな。
其毎　さあ話してちょうだい。
鳳姫　其毎ヤッ、おまえ（いつの間にそんなに仲がよくなった）。
土左衛門　俺は赤ん坊の頃、紀ノ川を流れてるところを雑賀の人たちに助けられた。引き上げられた時は息もしてなくて、みんなは俺のこと死んでるんだと思った。俺もこりゃ死んだなって思った。
其毎　あんたはまるで覚えてるみたいに云うね。
土左衛門　覚えてるよ、命の瀬戸際だったんだから。
其毎　そうかい（笑った）。
三月　それであなたは「土左衛門」という名が（ついたのですね）。
土左衛門　俺には乳を呑ませてくれた女がいたんだ。
其毎　お乳を。
土左衛門　覚えてるんだ。いつも白い着物で、俺はその人の胸にしがみつくみたいにして乳呑んでた。

其毎　（笑って）鳳姫様と同じでございます。あなた様も、おなかが空くと私の胸にしがみつくようにお乳を呑んでおいででした。

鳳姫　私はそんなことしません。

其毎　鳳姫様もその頃のこと覚えておいでなのですか。

鳳姫　知りません。

三月　その方は今？

土左衛門　ものごころつく頃には俺の前からいなくなってた。でもなんだか俺にはその人がほんとのお袋みたいに思えるんだ。

三月　それが紀州にお帰りになりたいわけなのですね。

土左衛門　その人捜し出して、俺のお袋になってくれって頼む。そんでェ、俺の嫁さんを見せるんだ。

其毎　まぁあんたお嫁さんがいるの。

土左衛門　これからだ。

其毎　（笑った）。

土左衛門　三月も早く対馬に帰ってお袋さんの傍にいてやれ。おまえがいなくて淋しい思いをしてるんじゃないのか。

三月　……見つかるとよろしいですね。あなたのそのお袋様とお嫁さんも。

其毎　オモニを求めるこころは朝鮮も日本も違いはないのですね。

土左衛門　オモニ？

三月　お袋様のことです。

鳳姫　三月、おまえがどんな境遇にあろうと、倭軍の手先であることに変わりはない。

三月　もとよりでございます。

其毎　その方は対馬においでの母御様との暮らしのため、倭軍に従われたのです。母と娘、女二人が生きていくたつきのためなのです。鳳姫様ッ。

鳳姫　先ほど云ったはずです。私の気持ちが変わることはありません。

其毎　この方にも私たちと同じ朝鮮の（民の）血が流れております。この方におすがりすれば、もしや旦那様と民泰様、そしてあなた様のお命をお救いすることができるのではと、

鳳姫　無用のことです。三月、一つ聞きます。

三月　はい。

鳳姫　おまえたち対馬の漁民が漁に出られず苦しんでいる時、秀吉という男は何をしていたのです。

三月　戦さをしておいでになりました。

鳳姫　おのれの国の民が飢え苦しんでいるのに、何もせず、戦さに明け暮れていたというのですか。なぜそのような男をおまえたちは「天下様」と呼ぶのです。

三月　天下を統一し、戦乱の世を終わらせるための戦さでございます。これによって安寧な暮らしが日本国に戻って参るのです。

鳳姫　では日本国の民が戦さを望み、秀吉を「天下様」にしたのですね。

三月　いいえ、そのようなこと、

鳳姫　おまえの父親は朝鮮の人間だと云いましたね。
三月　はい。
鳳姫　おまえは、その父の祖国を攻め滅ぼしに来た者どもの耳目となって働いて金銭を得、日本人の母と二人で生き延びようとしている。
三月　鳳姫様ッ（ことばがない）――。
土左衛門　朝鮮の姫様、あんまり三月をいじめないでくれ。その人は俺たちの仲間なんだ。
三月　いいのです。鳳姫様の云われる通りです。
土左衛門　ああ、姫様は腹が減ってなさるんじゃないか？　人間、腹が減ると機嫌が悪くなるもんだ。なにか喰うか？
鳳姫　日本人の施しなど受けない。
其毎　鳳姫様、あなたはここ数日の戦さで十分召し上がってはおられないはず。おからだに障ります。
鳳姫　それはおまえも同じこと。私は平気です。
土左衛門　やっぱりむこうで大将たちと喰おうよ。
其毎　民泰様もごいっしょでございます。どうか、
鳳姫　其毎ヤ、そのような恥知らずなまねを私にせよと云うのですか。

と、その時、下手の方より銃声。「新三郎、てめぇ何のつもりだッ！」男たちの怒声が飛び交う。再び銃声。新三郎、駆け込んで来る。続いて、

右馬之介、京阿弥。少し遅れて、小源太と十兵衛。小源太の腕からは血が流れており、十兵衛が布を巻いている。

土左衛門、鳳姫たちを避難させる。

右馬之介　新三郎、おまえそりゃ何のまねだ。

新三郎　（手には刃物が握られている。右馬之介たちに向け、肩で息をして）……。

京阿弥　新三郎ッ。

右馬之介　何のまねだって訊いてんだよッ。

土左衛門　何があったんだ、右馬之介。

右馬之介　新三郎が大将を刺しやがった。

土左衛門　ええッ！？　た、大将ッ。

小源太　大事ない。かすり傷だ。土左衛門、その姫様をあちらへ。

土左衛門　わかった。

小源太　三月も。さぁ。

三月　はい。

土左衛門、鳳姫、其毎を連れて去る。三月も続く。

十兵衛　大将、ちと油断めされたな（ギュッと縛る）。

小源太　痛ッ、もっと優しくやってくれよ十兵衛。

と、新三郎、小源太に走り寄り、刺す。小源太、それをかわして、新三郎の腕を掴み、

小源太　新三郎、先ほどといい、今といい、おまえ本気のようだな。

新三郎　おまえの命がほしい。

右馬之介　何ィ。

京阿弥　新三郎ッ。

小源太　京阿弥、おまえの差し金か。

新三郎　その人は関係ない。

小源太　ほう、庇うか。

十兵衛　そういやぁ大将に、何度も新三郎の踊りを勧めていたが、京阿弥、大将の隙でも狙うつもりだったか。

京阿弥　ふん。

小源太　京阿弥、どうなんだ。

京阿弥　だったらどうだって云うんだよ。

右馬之介　ちッ、土左衛門が京阿弥は得体が知れねぇって云ってたが、

十兵衛　珍しくあいつの勘が当たりやがった。

京阿弥　（急に艶めいて）ねぇ小源太様ァ、堪忍しておくれよ。ほんの出来心だよ。

右馬之介　ふざけんじゃねぇ。出来心で殺されてたまるか。

小源太　（新三郎に）何かわけがあろう。話せ（腕をねじ上げ、刃物を奪う）。

新三郎　（堪える）くっ……。

京阿弥　そんな手荒なまね、やめておくれよ。

十兵衛　黙っておれ。

新三郎　（朝鮮語で）おまえが釜山の海で撃ち殺した鎮水軍の長・鄭撥は私の夫。おまえは夫の仇だ。

一同、その言葉に驚く。右馬之介、新三郎の胸ぐらを掴み、

右馬之介　おまえ……ふざけるなッ。おまえ朝鮮軍の間者か。それで俺たちに近づいたんだな。

新三郎　（からだをひねり、右馬之介の手をはずそうとする）離せ。離せッ。

右馬之介　暴れるんじゃねぇ。おまえ、朝鮮の人間なんだな。おいッ（はっとして、手を離し、新三郎からも離れる）……。

十兵衛　どうした？　おい、右馬之介ッ。

右馬之介　……大将、こ、こいつ、女だ。

新三郎、さっとうずくまり、襟元の乱れを直し、胸元を隠す。一同、その様子を見つめる。

小源太　おまえ、何者だ。
新三郎　（からだを強ばらせ）……。
右馬之介　なんとか云えよッ。おい、女ッ！
小源太　そう怒鳴るな。
京阿弥　そうだよ、云えるものも云えなくなっちまうだろ。
右馬之介　てめぇは黙ってろ。（ひらめいて）さてはおまえも朝鮮の人間だな。
十兵衛　それはあり得ん。京阿弥は加藤清正のお伽衆なのだ。
右馬之介　じゃおまえは男だな？
京阿弥　ばか。私の寝床に忍び込んで、断りもなく胸に手ェ入れて、「くくり枕みてぇにやわらけぇ」って云ったのは、どこの誰だったかね。
右馬之介　お、おまえ、それ以上何にもさせてくれなかったくせに、エラそうにいうな。
十兵衛　いい加減にしろ、右馬之介。
小源太　（新三郎に）先ほどおまえは「チョンパル」と云ったな。
新三郎　（睨む）……。
十兵衛　「チョンパル」。おお思い出したぞ。釜山沖の水軍を指揮し、我ら日本軍が上陸するのを懸命に阻止せんとしていた敵将の名が、確か「チョンパル」。
新三郎　鄭撥は私の夫。
小源太　何。
京阿弥　その人の本当の名前は「キム ヨジュ」。麗珠の夫チョンパルを小源太様は

撃ち殺したんだよ。

小源太　俺がチョンパルを撃った。

新三郎　思い出したか、雑賀小源太ッ。

民泰（声）　待てッ、麗珠殿。

と、民泰がやって来る。

新三郎＝麗珠　あなたは……。

小源太　民泰、その女を知っているのか。

民泰　その方の夫鄭撥殿は、父・象賢の盟友。俺も幼き頃、よくかわいがっていただいた。

小源太　釜山沖の水軍を指揮しておられたというが。

民泰　鉄砲を主力とする日本軍を前に、鄭撥殿率いる水軍はほとんど壊滅状態となった。

麗珠　（泣く）。

民泰　死ぬ思いで部下の水軍を後に残し、命からがら釜山城へ戻られた鄭撥殿は、俺にこう申された。「日本軍上陸を許したは、ひとえに我が身一人の責め。また見殺しにしたあまたの部下たちに対し、このまま生きていては千載までの恥辱となる。もはや私にできることはこの城に残りできるかぎり時を稼ぐこと。あなたは東莱城の父上のところへ行き、日本軍侵攻の報を伝えよ。よいか民泰

殿、ゆめゆめ倭人の鉄砲を侮ってはならぬ。」そう云い残して、鄭撥殿は城門の外へ、銃声轟く中へ飛び出して行かれた。

麗珠　民泰様、お待ちください。それでは夫（鄭撥）は釜山の海で死んだのではないのですか。釜山城へ一度戻ったというのですか。

民泰　そうだ。俺の耳には釜山城で聞いた鄭撥殿の声がいまだ残っている。

麗珠　では、あの海へ落ちて死んだ男は、

京阿弥　あんたの亭主じゃなかったのかい？

麗珠　（低く笑う）。

京阿弥　新三郎？

麗珠　（次第に大きく笑い出し）ばかだね、私も。自分の夫とほかの男を間違えるなんて。

京阿弥　鉄砲の弾や弓矢が飛び交う戦さの最中（さなか）だもの、仕方ないよ。

麗珠　お笑いぐさだよ。夫の仇を討つために、私は仇の国の歌も踊りも覚えてしまったんだ。

京阿弥　新三郎ッ、しっかりおし。

麗珠　私を殺して。ね、死なせてください。夫の仇ももはや誰とも知れないんだ。

京阿弥　私との約束はどうするんだい。

麗珠　（つらそうに）あなたも所詮は日本人。日本人との約束なんてはじめから信じちゃいないよ。

京阿弥　新三郎ッ。

麗珠　お願い、もうその名で呼ぶのは止めて。死ぬ時ぐらい朝鮮の人間として死にたい。

と、玄蕃、ふいに現れて、

玄蕃　ならば望み通り死なせてやろう。

京阿弥　玄蕃様。

玄蕃　生かしておいて役に立たぬ朝鮮の人間なら殺してしまえ。耳鼻を削いでな。なあ民泰。

民泰　貴様というヤツは、

小源太　民泰、怀（こら）えるのだ。

民泰　くッ……。

玄蕃　右馬之介、おまえたちの得物を貸せ。

右馬之介　鉄砲を貸せってか。

玄蕃　せめてもの情け。鄭撥が殺された同じ雑賀の鉄砲で、夫の許へ行かせてやる。

右馬之介　いいか、俺たちにとって鉄砲は武士の刀と同じ。おいそれと貸してたまるか。

玄蕃　下らぬ矜持だ。我ら武士の刀といっしょにするな、ばか者め。

小源太　右馬之介、取って来い。

右馬之介　大将。

小源太　ただし、俺のを持ってくるんだ。

右馬之介　でも大将、
小源太　早く行けッ。
右馬之介　へいッ（行く）。
玄蕃　雑賀殿の得物を使えるとは光栄じゃ。
小源太　麗珠と云ったな。よく聞くがいい。俺ははっきりと覚えている。チョンパル殿を撃ったはこの俺だ。
麗珠　ええッ！？
小源太　釜山城陥落の直前、ひときわ勇猛な男がおのが名を告げ俺に斬りかかってきた。その名が「チョンパル」。俺はその男へ向かって弾を撃ち込んだ。
麗珠　（顔を手で覆う）。
小源太　おまえの夫を殺したのは俺だ。俺はためらうことなくチョンパルを撃ち殺した。
十兵衛　大将ッ。
麗珠　（きっと小源太を睨みつける）。
小源太　どうだ、俺が憎いか。
麗珠　憎い。
小源太　殺したいほど憎いか。
麗珠　殺したいほど憎い。
小源太　ならばおまえは、（麗珠の近くに顔を寄せ、声をやや低め）俺が生きている

間は死ねんぞ。死んでは俺を殺すことができんからな。

麗珠　え！？（小源太を見詰める）……。

と、そこへ小源太の鉄砲を持って、右馬之介が走り入る。

右馬之介　そら大将、持って来たぞ（渡す）。

玄蕃　こちらへ貸せ。

小源太　恐れながらこいつは、雑賀の党首だけが持つ特注の品。玄蕃様のような素人がお使いになれば、手元がぶれてたいそう危のうござる。

右馬之介　（笑う）。

小源太　餅は餅屋と申しまする。ま、お任せあれ。十兵衛ッ。

十兵衛　おお。

十兵衛、麗珠を立たせる。

民泰　小源太、俺との約束はどうした。

小源太　約束。

民泰　今後朝鮮の民は殺さぬとおまえは云ったぞ。

玄蕃　なんだと。まことかッ。

民泰　麗珠殿は我が同胞。朝鮮の民ぞ。

玄蕃　どうなのだ、小源太。さようなことを云ったのか。

小源太　この男、なんとしても我らには必要と思われました故。

民泰　何ッ。

玄蕃　こやつを利用するためだったと云うのか。

小源太　十兵衛、よいかッ。

玄蕃　答えよッ。こやつを利用するためだというのだな。小源太、太閤殿下にお答え申すつもりで返答いたせッ。

小源太　御意。玄蕃様の仰せの通りでござる。

民泰、小源太に向かっていく。十兵衛、右馬之介、引き押さえる。

玄蕃　策を弄するのは嫌いではなかったのか。

小源太　昨夜宗旨変えをいたしました。

玄蕃　ふん、ならばその女撃ち殺してみよ。

民泰　止めろッ。

京阿弥　新三郎ッ（麗珠の傍に寄ろうとする）。

玄蕃　京阿弥、近づくでない。おまえの始末は後でゆっくりつけてやる（刀の鍔に手をかける仕種）。

京阿弥　へん、二本差しが怖くて、田楽が喰えるかって云うんだよ。

玄蕃　相変わらず口の減らぬ女だ。

小源太　民泰よ、おぬしが昨日、鳳姫殿にかけたことばがなにやらあったな。

民泰　何！？

小源太　ほれ、鳳姫殿に朝鮮のことばで云ったではないか。忘れたか。

民泰　忘れはせん。

小源太　なればあれを、もう一度ここで聞かせてくれ。頼む。

民泰　何を考えている。

小源太　わけなどよい。友がこうして頭を下げ頼んでいるのだ。（民泰を十兵衛たちから引き寄せ）さ、もう一度、強い声で云うてくれ。

玄蕃　何のまねだ、小源太ッ。

小源太　なに、朝鮮の人間が死ぬ前に口にする文句（ですよ）。念仏がわりに唱えてやろうと思いましてね。

玄蕃　昨日のようなごまかしはもうきかんぞ。

京阿弥　（ロザリオを両手で握り、祈っている）……。

小源太　さあ民泰、おぬしが鳳姫殿に望んだ同じ思いを、俺はあの女に伝えたいのだ。

民泰　小源太……（朝鮮語で強く）麗珠殿、「決して死んではならぬ。生きよ。」

麗珠　（はっと顔を上げる）。

小源太　（民泰を真似て朝鮮語で）「決して死んではならぬ。生きよ。」

麗珠　（頷く）……。

玄蕃　さあやるのだッ。

小源太、民泰を離し、鉄砲を構えてヒキガネを引く。大音量で銃声が轟く。麗珠、静かに倒れる。

京阿弥　新三郎ッ！（駆け寄ろうとする）。

民泰　（京阿弥を止める）。

玄蕃　死んだのか。

小源太　はい。

玄蕃　さすがは雑賀殿、一発で。どれ検分いたそう。

小源太　無用でござる。

玄蕃　念のためだ。

小源太　雑賀の鉄砲をお疑いか。それとも俺の腕を。

玄蕃　んん……。

小源太　十兵衛、死体を片づけろ。

十兵衛　おおッ。

玄蕃　ふん。

十兵衛、麗珠のからだを背負い、去る。後ろへ続く右馬之介。そして京阿弥、去り際に小源太を見て、行く。

玄蕃　朝鮮の人間は信用ならぬ。平気で裏切りおる。雑賀殿、三月も当てにはならぬぞ。

小源太　いえ、あの者ばかりは懸念に及びません。

玄蕃　おお、ここにも一人信用ならぬ人間がおったの。

民泰　何。

玄蕃　雑賀殿はおまえとともに酒を呑むらしいが、わしはそのような恥知らずなまねはできぬわ。

玄蕃、笑いながら上手に去る。

小源太　気にするな（腕の布をまき直す）。

民泰　小源太。おまえ俺と友になるかわりに、以後、雑賀衆は一人も朝鮮の民を殺さぬと云ったな。

小源太　ああ、約束した。

民泰　約束を違えれば、雑賀衆の党首を辞め、俺の目の前で腹を切ると。

小源太　俺はまだ腹を切るわけにはいかんからな。

民泰　うまく切り抜けたつもりであろうが、どこまで本気なのだ。

小源太　何！？

民泰　おまえは今、豊臣秀吉に弓を引いたのだぞ。
小源太　民泰、俺の身を案じてくれるのか。
民泰　……。
小源太　どうなのだ。おまえは真実俺の友となる気持ちがあるのか。
民泰　友とは、強いられてなるものではない。
小源太　（民泰の胸ぐらを掴む）民泰。

と、その時、上手から土左衛門の声がする。小源太、民泰を放す。

土左衛門（声）　そんなとこで何してるんだ、玄蕃様。
玄蕃（声）　ちッ、何でもない。
土左衛門　（やって来て）変なヤツだな。大将、今玄蕃がそこに……。
小源太　（舌打ちして）聞かれてしもうたか。
土左衛門　民泰、おまえ、姫様の好きな物は何か知らないか。
民泰　何？
土左衛門　何が好物なんだ。猪は嫌いか？　あの姫様、何なら食べるんだ？

急速に暗くなる。

第三場　同じく東莱府城近く　加藤清正軍に従軍する雑賀衆の砦の内

その夜

闇。わずかに照らす月明かりの中、民泰と三月。あたりを憚る体にて、

三月　そのようなことできるはずがありません。

民泰　そなたしかいないのだ、三月。

三月　あなたは何か思い違いをしておいでです。私は日本軍に従う通詞。日本人なのです。

民泰　しかしそのからだの半分には我らと同じ朝鮮の血が流れているはず。なればこそ、そのように朝鮮国の名を名乗っているのであろう。どうだ、三月。

三月　私がこの名を名乗っているのは、母が望んだため。それだけのことでございます。

民泰　そなたの母は日本人ではなかったのか。

三月　そうです。日本（の対馬）で暮らす私が、父の祖国を忘れぬようにと母が望み、つけてくれました。

民泰　では、その父の生まれ育った祖国のためなのだ、三月。

三月　私は一介の通詞に過ぎません。

民泰　今夜俺は、加藤清正の幕下で捕虜となっておられる父上を、密かにこの砦の外へ逃がす。

三月　ええッ！？

民泰　父・象賢は近郷の民草に人望厚き城主。東莱城に生きて再びお戻りになれば、城に立て籠もる義兵たちの士気は必ずや高まる。

三月　この厳重な清正軍の砦からどうやってお連れするというのです。

民泰　俺は日本軍と刺し違えてもかまわん。

三月　ここには小源太様がいます。雑賀の鉄砲があるのですよ。

民泰　犬死にはせん。なんのためにこの砦の内で屈辱に耐え、俺が過ごしてきたというのだ。

三月　では小源太様に友となるとおっしゃったのは……。

民泰　すべて父上を逃がし、東莱城にお返しする機会を得るため。

三月　本当にそれだけでございますか。

民泰　他に何がある。

三月　小源太様と刺し違えてもよいとおっしゃるのですね。

民泰　おまえはあの男の身を案じているのか。

三月　今日本軍は、あの方を喪うわけにはいかないのです。

民泰　喪いたくないのは誰なのだ。

三月　今宵お聞きしたことは忘れます。それがあなたにして差し上げられる唯一のこと（行こうとする）。

民泰　待てッ、三月ッ。

三月　民泰様、かりに象賢将軍を東莱城までお連れすることができたとして、それで朝鮮軍が盛り返せるとお思いですか。

民泰　当然だ。なればこそ、俺は小源太と刺し違える覚悟なのだ。

三月　所詮は近郷の農民、付け焼き刃の義兵たちで鉄砲隊とどう戦うというのです。

民泰　義兵を率いるは、朝鮮国にこの人ありと云われた我が父・宋象賢ぞ。

三月　その象賢将軍は、何よりも民草の安寧な暮らしがお望みだったのではありませんか。

民泰　何。

三月　民草を戦さに駆り立てることが、あなたのお父上の御本意でございましょうか。

民泰　三月、そなたとて忘れてはいまい。我らには命よりも大切なものがあるのだ。

三月　民泰様ッ。

民泰　そなたの助けがいるのだ、三月。

三月　無理です。

民泰　無理は承知。もしやつらに見つかれば、小源太でも雑賀のやつらでも構わん。俺は倭軍を相手に派手な大立ち回りをしてやる。その間にそなたが父上を……。

三月　鳳姫様はどうなさるのです。

民泰　あいつも明日になれば、俺の思いがわかる。

三月　おわかりになったとして、どうお救いするというのです。

民泰　鳳姫はここで果てるのだ。

三月　それではあまりにおかわいそうです。あなたは生きよとおっしゃったではありませんか。

民泰　鳳姫。……鳳姫ッ。

と、二人の姿が闇に消え、入れ替わるように「鳳姫様」と鳳姫を呼ぶ声がし、次第に鳳姫と土左衛門、其毎の姿が別の闇の中から浮かぶ。

土左衛門　姫様、一口でいいから召し上がってください。

鳳姫　（顔を背け）……。

土左衛門　うまいから、な（器を差し出す）。

鳳姫　（それを払い除ける）。

土左衛門　（こぼれ）あちッ。

其毎　土左衛門、大丈夫かい？

鳳姫　其毎、なぜおまえはそのような者を庇うのです。

其毎　鳳姫様、あなたの苛立ちはよくわかります。でも今は、運命とでもお思いになって、この者が差し出すものを食すのが賢明というものです。

鳳姫　運命！？

其毎　そうです。鳳姫様、運命と意地を張り合うても仕方がありません。

鳳姫　この者たちが勝手に攻め込んできたのです。其毎はなぜそれを運命だなどと

云えるのです。

其毎　（こみ上げて）今となっては、そう思うより仕方がないではありませんか。

鳳姫　其毎ヤ、日本人がいるのです。毅然となさい。

土左衛門　よし、俺は決めたぞ。姫様が食べるまで俺も食べない。

其毎　土左衛門。

土左衛門　な、其毎、いいだろ？

其毎　おまえというお人は……（鼻をすすり）あなたが朝鮮の国の人間であれば。

土左衛門　姫様、ひもじい時には寝るに限る。眠ってしまえば、腹減ったの感じなくてすむからな。

鳳姫　私はひもじくもないし、眠くもない。

其毎　鳳姫様。

土左衛門　姫様は寝ることもせんのか！？　困ったなぁ。

と、三人の姿が闇に消え、入れ替わるように、小源太と京阿弥の姿が別の闇の中に浮かぶ。小源太は鉄砲の手入れをしている。

小源太　京阿弥、なぜ新三郎の手助けをした。おまえの恨みを買う覚えはないつもりだがな。

京阿弥　人間どこで恨みを買うか、わかったもんじゃありませんよ。

小源太　そうか。では俺が枕を高くして寝るためには、おまえを殺すしかないか（銃口を京阿弥に向ける）。

京阿弥　そうやって人の命を奪い、恨みを買い続けていくのが男という生きものさね。

小源太　（銃を外し）京阿弥は俺の親父殿のことを知っていると云ったな。

京阿弥　ああ、孫市様にはよくお声をかけてもらって、ご贔屓に与ったもんさ。

小源太　踊りと女を好んだ親父殿も、また数え切れぬほど人の命を奪った。

京阿弥　だからたんと恨みをお買いになって、何者かの手にかかってお果てになった。

小源太　なぜそのことを知っている。雑賀の身内しか知らぬこと。

京阿弥　蛇の道は蛇ってことですよ。

小源太　云え、どこで知った。

京阿弥　旅回りの猿楽師っていうのはね、闇雲に諸国を歩き回っているわけじゃないんですよ。あそこの大名はしみったれで踊りなんかご所望でない、向こうの地侍は景気はいいが猿楽よりも女が好み。いろんなうわさを耳で拾って、出かけますのさ。

小源太　では、親父殿を手にかけた輩は誰の放った刺客か、おまえの耳に入ってきておろうがッ。

京阿弥　めったなことは、（節・振りをつけて）「見ざる聞かざる云わざる」の、猿（ましら）が三匹、キキキキキー。

小源太　（笑って）誰にも云わぬ。さあ教えてくれぬか。

京阿弥　そこに隠れておいでの雑賀衆を向こうへやっていただけるんなら。さっきか

ら火縄のにおいがぷんぷんしてるよ。

と、物陰から十兵衛が鉄砲を構え、出てくる。

小源太　もうよい。

十兵衛　……。

小源太　行け。

十兵衛　（去る）。

小源太　これでよかろう。さあ、誰が親父殿を殺した。

京阿弥　……天下様。

小源太　（鋭く睨む）。

京阿弥　太閤豊臣秀吉様。

小源太　ふん。

京阿弥　卑しき猿楽師の耳にさえ入ること。小源太様とて……。

小源太　雑賀の鉄砲隊を味方に付ければ、戦さの流れが変わる。天下を我がものにせんとした秀吉には、忠誠も誓わず、どの大名に付くかわからぬ親父殿は、さぞ目障りなことであったろうよ。

京阿弥　思いのままに生きられぬことを、あれほどお嫌いになった方はおいでじゃありませんから。

小源太　なれどそのために親父殿は秀吉に殺された。これが真実（まこと）なら、俺

は親父殿を殺したヤツのため、この朝鮮国で戦さをしているということになる。

京阿弥　（茶化して）雑賀衆の再興という「大義」のためでございますれば。

小源太　京阿弥、もし親父殿が生きていたら、今の俺に何と云うかな。

京阿弥　……いったん戦さをすると決めて、この朝鮮くんだりまで渡ったのなら、今の小源太様のように四の五の云わず、「目の前の敵に立ち向かえッ」と、そうおっしゃるんじゃないでしょうかね。

小源太　おまえはそういう親父殿が好きだったか。

京阿弥　嫌いでしたね。

小源太　（笑った）京阿弥、もう寝るがいい（行こうとする）。よい話が聞けた。

京阿弥　（強く）小源太様はなぜこの戦さに迷っておられる。

小源太　……俺は、戦さには「大義」が必要と思っておった。石山本願寺で親父殿とともに信長軍と戦った時も、弥陀の敵、本願寺門徒衆の仏敵・織田信長を倒すため、そういう大義があった。だが、今度の戦さには大義が見えぬ。この朝鮮国の人々が何をした。何の罪もない民草を殺してなんの大義があるものか。

京阿弥　小源太様、人間は、大義があれば、戦さに勝つためならどんなむごいことでもやってのける。

小源太　大義が勝ち戦さの味方をしてくれるというのだな。さすれば代々の名将と呼ばれたサムライたちは、大義を産み出すに巧みであったということになる。

京阿弥　なかなか。

小源太　太閤殿下もまたしかりというわけか。

京阿弥　そうして太閤様は、大義の他にもうひとつ、強い味方をおつけになった。

小源太　何だ、それは。

京阿弥　私ら下々に及ぶ民草の、生きんする力ですよ。

小源太　民草の生きんとする力。

京阿弥　小源太様は、肥前名護屋の城下町にたむろする有象無象をご覧になったはず。

小源太　ああ、京、大坂と見まがうばかりの一大城下町。我らのような鄙に住む者には生き馬の目を抜くようであったぞ。

京阿弥　太閤様のお命じに従い、諸国から集まった諸大名の陣屋が立ち並び、それを目当てに、京、大坂はもとより、堺、博多からも商人や職人たちが集い来る。そしてそのまたおこぼれに与かろうと、幾千幾万の民草たちが集まってくる。女も子どももない。そういう民草たちの生きんする力に支えられて、戦さは膨れあがっていくんですよ。

小源太　そのおこぼれに与ろうとやって来たのが、京阿弥、おまえたち芸人だ。

京阿弥　なかなか。小田原の北条氏政様を滅ぼし凱旋なさった太閤様を、大坂の人々は歓喜して迎えました。その熱に浮かされたような民草の中で、私たち一座は大当たりを取りましたよ。

小源太　凄まじいことよ。

京阿弥　ことほどさように民草は戦さのおこぼれに与り、戦さはその民草の生きんとする力を吸い取って大きくなる。その持ちつ持たれつのために、戦さには「大義」とやらが入り用なんですよ。

小源太　……京阿弥、おまえは親父殿と枕を並べてそのような話をしていたのか。

京阿弥　え！？

小源太　なんと色気のない寝物語よな。

京阿弥　だから私は、「大義」ってやつを後生大事に（して）戦さにかまける男が嫌いだって云うんですよ。

小源太　しかしな京阿弥、こうも云えるぞ。民草は戦さの中にあってもなお逞しく生き続ける。そして忘れてならぬのは、戦さを望まぬ民草もこの世には大勢いる。

京阿弥　それが戦さで金を稼いできた雑賀衆の党首が云うことですか。孫市様なら、

小源太　「四の五の云わず、目の前の敵に立ち向かえッ」。

京阿弥　（少し笑った）。

小源太　京阿弥、親父殿がこれまでやってきた日本の戦さと、この朝鮮国での戦さと、何かが違うと思わぬか。

京阿弥　え？

小源太　釜山城での戦い以来、喉の奥にひっかかった魚の骨のように、俺はそれが気にかかってならなんだ。

京阿弥　右馬之介が、大将は変わったって私にこぼしてましたよ。

小源太　俺はようやくその喉の奥に引っかかった骨の正体がわかった。

京阿弥　何だったんです。

小源太　……此度の戦さ、我らが立ち向かわねばならぬ真の相手は、民草だというこ

とだ。

京阿弥　ええ！？

小源太　この砦の向こうに幾万幾百万の朝鮮の民がいる。その民草こそが、今我らの目の前に大きく立ちはだかっているのだ。よいか京阿弥。日本での戦さは、城を落とし、敵将の首を取ればそれですべてが終わった。近江の浅井、越前の朝倉、すべてそうだ。しかしどうだこの東莱城は。城主・象賢が捕虜となっては生死もわからぬであろうに、まだ城は落ちぬ。釜山城にしても同様。チョンパルを討ち取っても、なお我らに激しく抵抗する民草たちが大勢いた。この国を本気で攻め落とすつもりなら、すべての民草をなぎ倒す覚悟がいる。おれが迷い、四の五の云うていたのはこのことだったのだ。

京阿弥　小源太様。

小源太　それでも黙って戦うていけというのか、親父殿ッ。

小源太、天を仰ぐ。そこには紀州で見たのと同じ星々が輝いているのだろう。小源太、やおら銃口を天に向け、引き金を引く。星空に轟く小源太の銃声。

と、そこへ民泰、日本の刀を手に、何ものからか逃げるように駆け入って来る。小源太と付廻りになり――。

その時、闇の中から男の声で、

男（声）　象賢が逃げたぞォ。東莱城主、逃亡ッ。象賢が逃げたぞッ！　追えッ！

急速に暗くなり――。

第四場　東莱府城近く　加藤清正軍に従軍する雑賀衆の砦の内

翌朝　東莱城陥落の朝

其毎が気遣わしげに辺りを窺っている。

正面の大門が少し開いている。その外から声が聞こえる。

土左衛門（声）　それより先は行ってはダメだ。

鳳姫（声）　どうして？

土左衛門（声）　少しだけだって姫様云いなさったぞ。

鳳姫（声）　ここからではまだ城の様子が見えない。

其毎　（窺いながらも）鳳姫様、もうそのくらいになさいませ。これ以上は危のうございます。

鳳姫（声）　其毎は城のことが心配ではないのですか。

土左衛門（声）　姫様、云うこと聞いてくれッ。

鳳姫（声）　そこを退きなさい。

と、その少しだけ開いている扉から、朝鮮の男が一人、門の外と内とを窺いながら入ってくる。手には鎌。其毎、気がついて、

其毎　（驚き）おまえ。

男　そのなりは、おまえ朝鮮の人間だな。

其毎　（頷く）。

男　どうして朝鮮の人間がこの砦の中にいる。それに外にいるのは鳳姫様じゃねぇのか。どうして倭軍のやつらといっしょにいるんだ。

土左衛門（声）　姫様ッ、来るんだ。

鳳姫（声）　いやッ。

男　（鎌を振り上げ）いいか、俺のことは誰にも云うな。おまえも朝鮮の人間なら、祖国を裏切るな。

男、去る。と、大門が開いて、土左衛門（背に鉄砲を負っている）に手を引かれ、鳳姫が入ってくる。其毎、男を目で追うが、どうしようもなく――。

土左衛門　姫様、お願いだ。たまには俺の云うことも聞いてくれ。

鳳姫　その手を離しなさい。

土左衛門　す、すまない（慌てて離し、大門の扉を閉めに行く）。

鳳姫　どうしました、其毎ヤ。

其毎　い、いえ。何でもありません。

土左衛門　さあ姫様、約束だ。俺のつくった猪汁、食べてくれ。

鳳姫　いやです。

土左衛門　約束したじゃないか。

鳳姫　倭人との約束など誰が信じるものか。

其毎　鳳姫様、あなたを一歩でもこの砦の外に出したと知れれば、その人は咎めを受けることになりましょう。

鳳姫　だから何です。

其毎　どうか召し上がってください。もう二日も何も食べておいででないのですよ。

土左衛門　姫様、死んじまうよ。

鳳姫　いまだ東莱城に残る者たちも、食べるものも食べず抵抗を続けているはず。私だけが、それも日本のものを食べるわけにはいかない。

其毎　鳳姫様ッ。

と、そこへ右馬之介。

右馬之介　おい、土左衛門、朝飯の用意だ。手伝え。

土左衛門　俺は喰わないから、右馬之介が用意してくれ。

右馬之介　土左衛門ちゃん。

土左衛門　な、なんだよ。

右馬之介　いくらおまえがそんなことをしても、この強情な朝鮮の姫様は、おまえのことなんか目もかけてくれないぞ。

土左衛門　ば、ばかッ。そんなんじゃないよ。

右馬之介　いいからいいから。おまえまで腹減って倒れちまうぞ。

土左衛門　俺は、喰わないと云ったら喰わない。
右馬之介　やせ我慢すんなって。腹減ってるんだろ。
土左衛門　減ってない。

と、お腹が鳴る音がする。

右馬之介　（笑って）おめぇの腹は、ご主人様よりずっと正直だねぇ。
土左衛門　俺の腹じゃないよ。
右馬之介　おまえ今ぐうぅぅって鳴ったじゃねぇか。
土左衛門　鳴ってないよ。
右馬之介　じゃ誰が鳴ったっていうんだよ。

と、鳳姫がそっと手を挙げた、恥ずかしげに。

其毎　鳳姫様。
鳳姫　（うつむき）……。
土左衛門　俺の腹が鳴った。
右馬之介　へ？
土左衛門　ウソついた。すまん。今鳴ったのは俺の腹だ。
右馬之介　だってこの人（手上げてるぞ）。

土左衛門　違うって。姫様のお腹が俺たちみたいに物欲しそうに鳴ったりするもんか。

右馬之介　なに訳のわからないこと云ってんだよ（笑う）。

と、この時、先ほどの朝鮮の男が鎌を振り上げ飛び込んで来る。

男　（鳳姫に）ペシンジャ。

其毎　おまえはッ。

男　（朝鮮語で）城主の娘が倭人と笑い合うとは何事だ。（日本語で繰り返す）

鳳姫　私が裏切り者？　なにを云うのです。

男　おまえたちは朝鮮国の裏切り者だッ。

男、鳳姫に鎌を振り下ろす。と、土左衛門が庇って肩口に鎌を受けてしまい、倒れる。其毎は鳳姫を庇う。

右馬之介　土左衛門ッ。

と、男はいったんは離れるが、なおも向かって行こうとする。土左衛門、背の鉄砲を構える。

右馬之介　止めろ土左衛門ッ。大将の命令だ。朝鮮の人間を殺しちゃならねぇ！

土左衛門、銃を投げ捨て鳳姫の前に立つ。男、鎌を土左衛門のからだに振り下ろす。土左衛門、からだに刺さった鎌を手で引き抜き男を殴り倒す。

右馬之介　土左衛門ッ！

右馬之介、男を取り押さえようともみ合いになる。傷を負ってうずくまる土左衛門に、其毎が駆け寄る。と、鳳姫、大門に走り寄り、扉を開けようとする（門を外す）。

其毎　鳳姫様ッ！

土左衛門、起き上がり、鳳姫を引き止める。右馬之介、いったんは男を付き倒すが、鎌を振り回して牽制する男に近付くことができない。男、鳳姫に向かっていく。庇うように立つ土左衛門だが、反撃しようとしないので、男、再び鎌を振り下ろす。鎌で切られながら、

土左衛門　姫様は裏切り者なんかじゃない。其毎だって、朝鮮の国を裏切ってなんかないッ！

と、土左衛門、男を殴り飛ばす。よろよろと倒れる男。男を捕らえる右馬之介。がっくりとなる土左衛門。其毎、走り寄る。

右馬之介　（男を後ろ手にしながら）この野郎ッ、てめぇ東莱城の義兵か。

男　（顔を背ける）ッ。

鳳姫　其毎ヤ、もしや東莱城内では、囚われた私たちは裏切り者となっているのではありませんか。

其毎　そのような（こと）、あり得ません。

男　（笑う）。

右馬之介　どうなんだよッ。（胸ぐらを締め上げる）云えッ。

と、男、右馬之介を睨んでいたかと思うと、舌を噛む。

右馬之介　ちッ、舌噛みやがった。

男　もうすぐ俺たち義兵軍がこの砦を取り囲む。おまえたちもおしまいだ（死ぬ）。

と、土左衛門、よろよろと大門の扉を出、外の様子を窺う。と、その時、鈍い音がした。土左衛門の口から「うっ」と呻き声がもれる。動かない。

右馬之介　土左衛門？　おい、土左衛門、どうした？

土左衛門、ゆっくりと倒れる。

右馬之介　土左衛門ッ。（駆け寄り、起こし）おい、土左衛門ッ！

と、十兵衛と小源太が飛び込んでくる。

十兵衛　どうしたッ！

右馬之介　土左衛門が、土左衛門がッ。

小源太　土左衛門がどうしたのだッ？

十兵衛　（門の外へ走り、血の付いた瓦を拾い）瓦だ。瓦を投げつけてきやがった。

小源太　おい、しっかりしろッ（右馬之介に手伝わせ、土左衛門を門の中へ入れる）。

土左衛門　大将、すまない。許してくれ。

其毎　土左衛門（寄る）。

土左衛門　其毎ヤ。

小源太　（土左衛門を其毎に渡す）。

其毎　土左衛門、しっかりしなさい。

土左衛門　オモニぃ。

其毎　え？

土左衛門　オモニ、変だなぁ。なんか目の前が真っ白くなってきたよ。
其毎　あなたは紀州に帰るんでしょ。オモニを探すんでしょ。
土左衛門　へへ、もういいや。
其毎　ばかッ。なにを云うのです。
土左衛門　だってここにオモニがいるもん。
其毎　土左衛門。
土左衛門　朝鮮の姫様、もう一度お願いだ。姫様が食べないと、この人（其毎）も食べないから、だから、な、姫様、食べてくれ。
鳳姫　……。
其毎　土左衛門、こんなところで死んではいけませんッ。
土左衛門　オモニぃ。
其毎　（朝鮮語で返事）。
土左衛門　……お袋様、どこだよ。
其毎　ここにいるよ。
土左衛門　……どこにいるんだよ、かあちゃん。
其毎　ここだよ。
土左衛門　俺、オモニのこと呼んだことないから、何て呼んでいいかわからないよ……（死ぬ）。
其毎　……土左衛門。土左衛門ッ（泣き伏す）。

と、右馬之介、鉄砲を掴み、大声を上げながら大門の外へ出ようとする。

十兵衛　よせッ！

右馬之介　もう我慢できねぇ。

十兵衛　大将の云いつけに背くつもりか。

右馬之介　畜生ッ！（天に向かって撃つ）。大将、土左衛門を殺したのはあんただ。

十兵衛　右馬之介ッ。

右馬之介　大将のわけのわからん命令を守って、土左衛門は死んだんだ。

小源太　わけのわからん命令だと。

右馬之介　大将がこの戦さの何を迷ってるのか知らねぇが、朝鮮の人間を殺すなっていうあんたの云い付けを馬鹿正直に守って、それで土左衛門は死んだんだッ。

十兵衛　もうよい、止めろ。

右馬之介　雑賀衆の党首がそれで務まるのかッ！

十兵衛　右馬之介ッ（殴る）。

右馬之介　（泣く）。

と、小源太、土左衛門の遺体をかき抱き、やがて、

小源太　そうか、おまえは俺の云い付けに背かなんだか。わけのわからぬ俺の命令をよう最後まで聞いてくれた。俺は党首として果報者だ。だがな土左衛門、忘れ

たか。俺はもう一つ命じたぞ。この戦さにおいて我ら一人も死ぬことならんと、そう云いつけたではないか。土左衛門、おい、聞いておるのか。返事をせえ、土左衛門。死んではならんと云ったではないか。……土左衛門、すまなんだ。俺を殴るがいい。目を開けて、早う俺を殴り倒せッ。おい、土左衛門ッ、目を開けいッ！

右馬之介　大将……。

小源太　其毎、すまぬがそなた、土左衛門の傍についていてやってくれぬか。

其毎　はい。

土左衛門の遺体を、十兵衛が片づけようとする。右馬之介は手伝おうとしない。

鳳姫　待って。

鳳姫、自分の上着を土左衛門の遺体にかける。

其毎　鳳姫様。

と、花道奥より男たちの怒声がし、向こうより、民泰。それを追って（玄蕃の配下）、玄蕃が駆け入って来る。それぞれ手に刀を持っている。

この間に本舞台では以下のやりとり。

十兵衛　大将。

小源太　土左衛門を頼む。

十兵衛　はい。

十兵衛の背中に土左衛門の遺骸を背負わせる右馬之介。二人、去る。後に従い行く其毎。

鳳姫　（民泰を見とめ）兄様ッ。

七三にて、民泰と玄蕃の小競り合いあって、小源太、鳳姫を引き留めている。

玄蕃　民泰。昨夜半象賢がこの砦より逃亡したは、おまえが手引きしたことであろう。

民泰　ほう、父上はお逃げなさったか。

玄蕃　貴様、ぬけぬけと。

民泰　父上が城にお戻りになれば、義兵軍を立て直し、おまえたちなどすぐにも打ち破ってくれる。

玄蕃　小源太、こやつを撃ち殺せ。もはや生かしておいてなんの役もなき男。
小源太　玄蕃様。
玄蕃　それとも象賢の逃亡、よもやおまえが手引きしたわけではあるまいな。雑賀小源太、まこと太閤殿下に弓引くつもりかッ。
小源太　……（民泰を見つめ、やおら刀を抜き）では、これで闘いとうございます。
玄蕃　勝手にいたせ。
民泰　鳳姫、下がっておれ。
鳳姫　兄様。
民泰　俺がまこと朝鮮国の民としての誇りを失ったか、よく見ておくのだ。

民泰、小源太に向かっていく（本舞台へ）。小源太、刀を抜き構える。と、その時、「お待ち下さい」の声とともに、三月が花道を駆け込んでくる。二人、しばし動きが止まり――。

玄蕃　（七三にて）何事だ。
三月　はい。清正公よりの書面にございます（差し出す）。
玄蕃　（受け取り読み）なに、清正公御出立。
三月　はい。いつまでも東莱城に構ってはおられぬとの仰せでございます。
玄蕃　ちっ。
三月　第一軍の小西行長様、あと十日余りで都・漢城に入城とのことにございます。

玄蕃　それはまずい。同じ肥後の国を小西行長と二分する清正公としては、なんとしても漢城に一番乗りをして、行長の鼻を明かしてやりたいおつもりなのだろうが、ええい、それにつけても忌々しい東莱城よ（先を読む）。

三月　依然農民たちの抵抗が続いております。

民泰　東莱城は陥落せぬ。父上がお戻りになったのだ。

玄蕃　（書状を読んでいたが）三月、おまえはこの書面に書いてあること、知っておるのか。

三月　……はい。先ほど、清正公よりお聞きいたしました。

玄蕃　ではおまえの口から、民泰に教えてやれ。

三月　玄蕃様、どうかお許しを。どうか……。

玄蕃　命令じゃ。自分の立場を弁えよ、三月。

三月　（振り切るように本舞台へ）民泰様、あなた様が頼みとする父上様は、昨夜のうちに東莱城内にて処刑なされましてございます。

民泰　……（驚き）何を云う。

玄蕃　ははは、せっかく城へ逃げ帰ったに、不運なことよな。

小源太　三月、何があったというのだ

三月　はい。東莱城へ忍ばせてある清正公の間者によりますと、慶尚道（キョンサンギ）軍務官の長・李郭（イ カク）という者が、象賢将軍を讒訴したそうにございます。東莱城がかようにたやすく攻め込まれたは、捕虜となった象賢が寝返り、日本軍に軍略を授けているからだと。

民泰　父上が。ばかな。デタラメに決まっている。

三月　おそらくその李郭という男が、軍務官としてのおのが責を問われる前に、卑劣にも先手打ったのでございましょう。

玄蕃　朝鮮国の連中もよほど頭に血が上っていると見える。そのような男の云うことを真に受け、大将軍・宋象賢を殺したのだからな。

鳳姫　（泣く）。

民泰　……父上が処刑などされるはずがない。しかも味方の朝鮮国によって、そのようなことあるはずがない。

小源太　民泰。

民泰　これまで父上が朝鮮国のため、どれほど身を粉にして働いてこられたというのだ。命も魂もすべてこの国に捧げておいでだったのだ。その父上を、朝鮮国は処刑しただと。

小源太　民泰ッ。

民泰、地鳴りのごとく、全身全霊をうち振るわせるがごとく泣く。慟哭する声が周囲を圧する。

と、やおら民泰は刀を振り上げ、玄蕃に切りかかる。玄蕃、抜刀して民泰の刀を弾き返す。

玄蕃　小源太、手を出さず見ておれ。頭に血の上った朝鮮人などわし一人で十分だ。

小源太　玄蕃様ッ。

玄蕃　俺はおまえが思うているほど愚鈍ではない。

小源太　……。

と、玄蕃と民泰の立ち回り、よろしくあって、

鳳姫　兄様ッ。

小源太　民泰、もうよい。おまえがこれ以上俺たちと闘う必要はない。

民泰　ある。おまえたちは、我が祖国に攻め込んだ蛮族なのだ。

小源太　おまえは、まだ父を殺したこの朝鮮国を祖国と呼ぶのか。この朝鮮のために、まだ命をかけるというのか。

民泰　俺は朝鮮国を愛している、我が祖国として。父上を愛するように。

小源太　民泰ッ。

鳳姫　兄様。

玄蕃、民泰のふいを突き、肩口を切る。倒れる民泰。あと一手で民泰を斬り倒すという瞬間、小源太、鉄砲を放ち、玄蕃の刀を撃ち落とす。

鳳姫、民泰の傍へ駆け寄る。

そこへ十兵衛と右馬之介、戻ってくる。

十兵衛　大将ッ。
玄蕃　小源太、何をするッ。
民泰　手出し無用。
小源太　玄蕃様、この者を死なすわけには参りません。
玄蕃　何と申す。
小源太　昨日立ち聞きをしておいでだったならご存知のはず。朝鮮の民を殺してはならぬと雑賀の者たちに命じましたこと、それがしの本心にございます。雑賀の若者が一人、その云い付けを守り抜いて死にましたるゆえ、党首として決して破るわけには参りませぬ。
玄蕃　おのれ、よくもぬけぬけとッ（小源太を殴る）。
小源太　……玄蕃様、俺はその男を助けてやりたい。
玄蕃　この裏切り者ッ（殴る。次の小源太のせりふ中も殴り続ける）。
小源太　枯れることない泉のように、こんこんと湧き出る民泰の祖国への愛。俺はこんな男を他に知らん。こういう心美しい男がなぜこうまで苦しまねばならん。俺は力を貸してやりたい。そうお思いにはなりませぬか、玄蕃様。
玄蕃　小源太、思い違いをするな。わしは我が君清正公の御意に従うだけ。その清正公も太閤殿下の仰せに従い、この朝鮮の地で戦さをしておいでだ。わかるか。わしの大義は清正公の御意に従うことだけ。
小源太　その君主が、異国の民草を相手に、人の道に外れたことをしているのだ。
玄蕃　たとえ君主が道を踏み外そうとも、臣、臣たらざるべからずの教え。それが

家臣たる者の大義なのだ。

小源太　さようにハラを据えた武士（もののふ）の覚悟をお持ちのあなたが、なぜおわかりにならぬ。

玄蕃　おまえのような男には、我らが大義、死ぬまでわかるまい。

小源太　……では、そのような大義を戴く日本国には、俺はもうおれん。

玄蕃　なんだと。

十兵衛　大将。

小源太　俺は今よりこの朝鮮国に留まり、もう日本には戻らん。

右馬之介　戻らんって、そりゃ（どういうことだ）。

玄蕃　そのような勝手な真似を許すと思うか（刀を抜く）。

小源太　三月、民泰の手当をしてやってくれ。

三月　はい。

玄蕃　三月、おまえも裏切るのか。

三月　（民泰に）さあ、あちらへ。

三月、民泰を連れて行く。鳳姫も続く。

玄蕃　ちっ。やはり朝鮮の人間は信用ならんわ。小源太、おまえもな。

玄蕃、小源太に斬りかかる。十兵衛、すぐに鉄砲を構える。小源太と玄

蕃の立ち回り少々あって、鍔迫り合いとなり、

玄蕃　小源太、朝鮮国へ寝返るというのだな。

小源太　御意。

と、この時十兵衛、玄蕃の足先に鉄砲を放つ。続いて右馬之介の鉄砲。

小源太は剣先の間合いを詰めていく。じりじりと追いつめられていく玄蕃。

玄蕃　このこと、しかと清正公にご報告申し上げる。

小源太　このまま清正の元へ走れば、お目付役のあなたは責を問われるだけ。

玄蕃　承知。清正公が腹を切れと仰せなら、俺は従うだけ。

小源太　（何か云おうとするが）……。

玄蕃　万が一にも切腹を免れたのなら、俺は必ず舞い戻ってくる。

小源太　俺を殺しにか？

玄蕃　知れたこと（笑う）。

玄蕃、花道へ。駆け去る。

右馬之介　（玄蕃を途中まで追い）おお、逃げ足の早ぇこと。

小源太　十兵衛、右馬之介、おまえたちは雑賀衆のことを人一倍気にかけてくれてい

た。心から礼を云う。だがもうよい。右馬之介（おまえ）が云うように、俺は雑賀衆の党首失格じゃ。つき合うことはないぞ。

十兵衛　大将ッ。

小源太　俺は日本を捨てると云っているのだッ。

十兵衛　俺にとって雑賀衆とは大将そのもの。大将がこの朝鮮の地に残ると云うのなら、俺も残る。俺はどこまでも大将についていく。

小源太　十兵衛。

十兵衛　右馬之介、おまえどうする。

右馬之介　俺か。俺は紀州に帰るさ。

十兵衛　右馬之介。

小源太　よい。人にはそれぞれ生き方というものがある。

十兵衛　なぜだ右馬之介。これまでいっしょにやってきたではないか。

右馬之介　土左衛門の骨を、紀州の土に帰してやりてぇ。

小源太　右馬之介、頼んだぞ。

十兵衛　もう戻ってこんのか、雑賀衆には。

右馬之介　戻ってきてほしいか。

十兵衛　おお、俺はおまえがおらぬと寂しうてならん。

右馬之介　おいおい、俺にはそっちの気はないぞ。

十兵衛　（銃口を右馬之介に向けた）。

右馬之介　（笑った。ふいに）……大将、飯の用意をする者がもう誰もいねぇな。

小源太　右馬之介。

と、そこへ三月、戻ってきて、

三月　小源太様、民泰様のお傷、大事ございません。

小源太　それはよかった。

三月　はい。

小源太　三月、どうだ、俺たちといっしょに行かぬか。

三月　小源太様、私は老いた母を一人、対馬に残しております。

小源太　そうであったな。

三月　申し訳ございません。

小源太　いや、もうよい。生きて母御様のところへ帰るのだぞ。

三月　はい。

小源太　おまえのような身の上の人間が、我らと朝鮮国との架け橋になればよいがの。

三月　ずいぶんとこの身の上を恨みに思ったこともございましたが、こうして小源太様とお会いできたのも、この身の上なればこそ。

小源太　さ、もう行くがよい。

三月　小源太様、私とお約束をしてくださいませ。決して死にはせぬと。

小源太　俺はもう約束というものを守る自信がのうなってしまった。

三月　いいえ、私たちは約束を守ろうとする人の姿を美しいと思うのではございま

せんか。目に見えぬ人のこころという覚束なきものを信じる力があればこそ、この憂き世を強く生きられるのかも知れません。小源太様、どうかお命だけは大切になさってくださいませ。

小源太　三月、俺はおまえと別れたくないのぉ。

三月　（込み上げるものを抑え）……。

三月、小源太に深々と頭を下げ、花道を去る。

と、そこへ京阿弥。旅支度の体。

小源太　京阿弥、おまえたちも行くのか。

京阿弥　私らは清正公に従わねば、生きて行けぬ身でございますよ。

小源太　そうか。

京阿弥　生きてさえいれば、いずれまたお目にかかれるやも知れません。どうかご無事で。

小源太　ああ、おまえもな。では京阿弥、最後に踊ってくれぬか。そちたちの踊り、しっかりと目に焼き付けておく。

京阿弥　喜んで。では。とざい、とーざい。

と、柝が入り、女たちが入ってきて、総踊りとなる。流れる曲は朝鮮の国の調べのように聞こえる。その中に新三郎＝麗珠の姿がある。

右馬之介　あ、新三郎。新三郎じゃねぇか。（十兵衛に）ほら、ありゃ新三郎だッ。

麗珠、一心に踊っている。

と、その時、大門を叩く音と女の声。

女（声）（朝鮮語で）あんたッ、あんたぁッ。

小源太　京阿弥、もう行け。

京阿弥、一礼し、女たちに「行くよッ」と声をかける。女たち、去る。

右馬之介、別れを惜しむ。麗珠が小源太の前を通り過ぎようとした時、

小源太　麗珠、そなた「生きる」ということは何だと思う。

麗珠　……はい。私が明日もこの身ひとつ精一杯踊ることだと思います。

麗珠、頭を深々と下げ、京阿弥とは違う方向へ去る。

小源太　開けろ。

右馬之介　おお。

右馬之介、扉を開ける。と、そこには朝鮮人の女と、その子どもらしき幼女が女に抱きかかえられるようにして立っている。

右馬之介　大将。

十兵衛　気をつけよ。義兵かも知れぬ。

小源太　わかっておる。

女　この子の父親を捜してる。あんたたち知らないか。

小源太　父親？

女　今朝、この扉の中へ入ったきり出てこないって、この子が云うんだ。

十兵衛　おまえは？

女　この子の母親だ。

十兵衛　では探している男はおまえの夫か。

女　どこにいる。まさか

右馬之介　もしかして、さっき舌噛み切って死んだ農民じゃねぇか。

女　死んだ？（泣き崩れる）。

幼女　オモニっ。

小源太　（幼女に）名は？（朝鮮語で）名前は何というのだ？

幼女　淑恵（スクヘ）。

小源太　スクヘ。いい子だ（頭をなでようとする）。

女　（幼女を抱き寄せ、頑なに）あんたたちがあの人を殺したんだな。
右馬之介　違う。
小源太　すまぬ。
女　淑恵、そいつらが父さんを殺したんだ。
幼女　あたしも殺すの？
小源太　殺しはせん。
幼女　だってあたしの父さんを殺したんでしょ？
小源太　……許せ（深々と頭を下げ）。俺たちはもう誰も殺しはせん。
幼女　おじさんは、お名前なんて云うの？
小源太　俺か？　俺は、雑賀小源太だ。
幼女　さいか？　……サヤカ！
右馬之介　違うよ、雑賀、
小源太　（制して）そうだ。俺の名は「サヤカ」。この地に留まり、朝鮮の民となって生きると決めたからはもう雑賀小源太でもあるまい。今より俺はサヤカだ。

と、そこへ民泰。後ろより鳳姫。

民泰　では、サヤカ。先ほどの決着をつけよう。まだ勝負はついていない。
小源太　民泰。
鳳姫　兄様。

小源太　俺はもう日本人ではない。今おまえも云ってくれたように「サヤカ」なのだ。闘うことはない。

民泰　勝手なことを云うな。俺はおまえたちを許したわけではないッ。

と、民泰、小源太に切りかかる。小源太、やむを得ず応戦し、二人の一騎打ち。大立ち回りとなる。二人の男の体が砦の壁に激しくぶち当たり、その度に壁は倒れ落ちていく。

と、この時、大門の向こうに炎が見える。

十兵衛　大将、火だ。見ろ、東莱城が燃えているぞッ。

右馬之介　おお、ほんとだ。景気よう燃えてるぞォ。

十兵衛　右馬之介ッ。

民泰、燃えゆく東莱城の方を茫然と仰ぎ見ながら、やがてがっくりと跪く。鳳姫、駆け寄り、

鳳姫　兄様、もういいのです。兄様の朝鮮国へのお気持ち、よくわかりました。

民泰　違う。違うのだ鳳姫。

鳳姫　何が違うのです。

民泰　俺は、俺は父上をお助けすることができなかった（泣く）。

鳳姫　兄様（抱く）。

小源太　民泰、戦さの度にこのような別れが幾度となく繰り返されるのだ。だから民泰よ、せめて俺たちだけは、友としての絆を固く結び、終生ともに生きようぞ。

民泰　おまえはまこと朝鮮の民草として生きるというのか。

手を差し伸べる小源太。振り仰ぎ、小源太のその手をとる民泰。

小源太　約束したぞ、民泰よ。

民泰　小源太。

小源太　俺たちの思いは一つ、民草の安寧な暮らしだ。この戦さを一日も早く終わらせ、二つの国が仲ようなる。いや、仲ようならねば民草の安寧などない。

民泰　その思い、俺と共に胸に抱くというのだな。

小源太　（ふと笑って）おおそうだ。俺たちがその手本になろうではないか。どうだ、民泰。（再び固く民泰の手を握り、次第に豪快に笑い出す）。

燃え上がる東莱城。その炎を背に、二人の男がきっと正面を見据えて立つ。見つめるその先にあるものは――。

――幕――